

# 比沙門遺跡

一般県道古戸館林線社会資本総合整備(防災・安全)  
(交安・重点)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

群馬県太田土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 比沙門遺跡

一般県道古戸館林線社会資本総合整備(防災・安全)  
(交安・重点)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

群馬県太田土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 序

群馬県太田市古戸町から邑楽郡大泉町、同千代田町を経て、館林市赤土町に至る一般県道古戸館林線の起点に当たる古戸交差点は、利根川をはさんで群馬県太田市と埼玉県熊谷市とを結ぶ刀水橋北詰からほど近い位置に在るため、日頃より交通量が極めて多く、さらに、周辺には交差点が連続していることから、交通渋滞がはなはだしい場所でありました。

そこで、道路の渋滞を緩和し、交通事故を減少させるため、変則交差点を無くし、十字交差点へと改良する工事が群馬県によって行われることとなりました。

工事対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、群馬県文化財保護課による確認調査により、埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることとなり、令和元年度に当事業団が発掘調査を実施しました。その結果、中近世の溝などの遺構と土器、陶磁器等の遺物が発見され、令和3年度に発掘調査の成果をまとめる整理作業を実施し、このほど発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県県土整備部、群馬県太田土木事務所、群馬県地域創生部文化財保護課、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、地元関係者の方々などに多大なるご指導とご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明と、豊かな地域社会の形成に役立てられますことを願い、序といたします。

令和3年8月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 向田忠正



# 例 言

1. 本書は、「令和1年度一般県道古戸館林線社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業」に伴って発掘調査された比沙門遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県太田市古戸町168-3、168-4、168-5、168-7、168-8、168-9、245-2、245-3、558-2、558-3、596-2、596-3、605-3、605-4、605-5、615-2、615-3に所在する。調査対象面積は2,555.78㎡である。
3. 事業主体は群馬県太田土木事務所である。
4. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

名 称：「令和1年度一般県道古戸館林線社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業」

履行期間：令和元年12月1日～令和2年3月31日

調査期間：令和2年1月1日～令和2年1月31日

調査担当：石田 真・長澤典子(主任調査研究員)

遺跡掘削工事請負：技研コンサル株式会社

地上測量委託：技研コンサル株式会社

6. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

名 称：令和2年度一般県道古戸館林線社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業

履行期間：令和3年3月31日～令和3年8月31日

整理期間：令和3年4月1日～令和3年6月30日

整理担当：高島英之(専門員(総括))

7. 本書作成担当は次のとおりである。

編集・本文執筆：高島英之(専門員(総括))

遺物観察：石器・石製品 岩崎泰一(専門調査役)

古代土師器・須恵器 神谷佳明(専門調査役)

中近世陶磁器・土器 大西雅広(専門調査役)

金属・木製品 板垣泰之(専門員(主任))

デジタル編集：齊田智彦(主任調査研究員・資料統括)

遺物写真撮影：石器・石製品 岩崎泰一

古代土師器・須恵器 高島英之

中近世土器・陶磁器 大西雅広

金属器・木製品 板垣泰之

遺物保存処理：板垣泰之、関 邦一(専門調査役)

8. 石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。
9. 出土遺物および写真・図面等記録類は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
10. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関、諸氏にご助言をいただいた。

群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、太田市教育委員会

# 凡 例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲したが、整理作業の過程で変更したものもある。
2. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第IX系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。
3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。ただし、遺構によってはこの限りではない。  
遺構平面図 溝1/80、1/120、1/160  
遺構断面図 溝1/40
4. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。  
土師器・須恵器・石器(石鏃以外)・石製品1/3、金属製品1/2、木製品1/4
5. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図下に「L=○○m」のように表記した。
6. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省水産技術事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修1988『新版標準土色帳』によった。
7. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通り(テフラの名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』東京大学出版会による)。  
As-A…浅間A、As-B…浅間B、Hr-FP…榛名山二ツ岳伊香保

# 目次

序

例言

凡例

目次

挿図・表・写真図版目次

第1章 調査に至る経緯、方法と経過	1	第3章 発見された遺構と遺物	19
第1節 調査に至る経緯	1	1. 1号溝	19
第2節 発掘調査の方法	2	2. 2号溝	20
1. 調査区と座標の設定	2	3. 3号溝	21
2. 発掘調査の方法	3	4. 4号溝	21
3. 遺構測量	4	5. 5号溝	25
4. 遺構写真撮影	4	6. 6号溝	31
第3節 発掘調査の経過	4	7. 7号溝	31
第4節 整理作業の経過と方法	5	8. 8号溝	33
第2章 遺跡の地理的、歴史的環境	6	9. 9号溝	33
第1節 地理的環境	6	10. 11号溝	36
第2節 歴史的環境	6	11. 12号溝	36
1. 旧石器時代	8	12. 13号溝	37
2. 縄文時代	8	13. 15号溝	37
3. 弥生時代	8	14. 16号溝	37
4. 古墳時代	8	15. 17号溝	38
5. 奈良・平安時代	9	16. 遺構外出土遺物	38
6. 中世	12	第4章 調査成果の整理とまとめ	41
7. 近世	13	遺物観察表	
第3節 基本土層	14	写真図版	
		報告書抄録	

# 挿図目次

第1図 遺跡の位置(国土地理院1/50,000地形図「深谷」平成26年7月4日加工) . . . . .	2	第10図 4・9・15～17号溝 . . . . .	26
第2図 調査位置図 . . . . .	3	第11図 4・9・15～17号溝土層断面(1) . . . . .	27
第3図 周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課5万分の1都道府県土地分類基本調査(深谷)を一部加工) . . . . .	7	第12図 4・9・15～17号溝土層断面(2)、4号溝出土遺物 . . . . .	28
第4図 周辺遺跡分布図 . . . . .	10	第13図 4・16号溝出土遺物 . . . . .	29
第5図 基本土層図 . . . . .	15	第14図 5号溝、出土遺物 . . . . .	30
第6図 全体図 . . . . .	17	第15図 6・13号溝 . . . . .	31
第7図 1号溝 . . . . .	20	第16図 6・13号溝土層断面、13号溝出土遺物 . . . . .	32
第8図 2号溝 . . . . .	22	第17図 7・8・11・12号溝 . . . . .	34
第9図 3号溝 . . . . .	23	第18図 7・8・11・12号溝土層断面、7・11号溝出土遺物 . . . . .	35
		第19図 遺構外出土遺物 . . . . .	39

# 表目次

第1表 周辺遺跡一覧表 . . . . .	11	第3表 遺物観察表 . . . . .	42
第2表 検出遺構数一覧表 . . . . .	40	第4表 非掲載遺物一覧表 . . . . .	44

# 写真目次

P L . 1	1	調査区全景(上が北西)	P L . 6	1	7・8・11・12号溝全景(南西から)
	2	1・2区全景(東から)		2	7・11・12号溝C-C'セクション(北東から)
P L . 2	1	3区全景(東から)		3	8号溝C-C'セクション(北東から)
	2	4区全景(南西から)		4	7・11・12号溝全景(南西から)
	3	1号溝全景(南東から)	P L . 7	1	7・11・12号溝D-D'セクション(南西から)
	4	2号溝全景(南東から)		2	9・16号溝A-A'セクション(南から)
	5	1号溝A-A'セクション(南から)		3	9・16号溝全景(北西から)
	6	2号溝A-A'セクション(南から)		4	9号溝A-A'セクション(南から)
P L . 3	1	3号溝全景(北東から)		5	16号溝南側全景(南東から)
	2	2号溝B-B'、3号溝A-A'セクション(南から)	P L . 8	1	15号溝全景(北から)
	3	2・3号溝全景(北東から)		2	17号溝全景(北西から)
	4	4～9・11～13・15～17号溝全景(上が北西)		3	1区基本土層1(南から)
P L . 4	1	4号溝全景(南東から)		4	4区基本土層2(南東から)
	2	4号溝A-A'セクション(南から)		5	4区基本土層3(南東から)
	3	4号溝南側杭列状況(北から)		6	3区基本土層4(北から)
	4	4号溝北側全景(南から)		7	1区調査風景(南東から)
	5	4号溝遺物出土状況(西から)		8	2区調査風景(南東から)
	6	5号溝2区部分全景(北東から)	P L . 9		4号溝出土遺物(1)
	7	5号溝1区部分全景(北から)	P L . 10		4号溝出土遺物(2)・5号溝出土遺物
P L . 5	1	5号溝C-C'セクション(南西から)	P L . 11		7～9・11号溝・遺構外出土遺物
	2	6号溝2区部分全景(南から)			
	3	6号溝C-C'セクション(北東から)			
	4	6・13号溝F-F'セクション(北から)			
	5	6・13号溝1区部分全景(北西から)			



# 第1章 調査に至る経緯、方法と経過

## 第1節 調査に至る経緯

一般県道古戸館林線は、太田市古戸町の国道407号線との交点である「古戸交差点」を起点に、邑楽郡大泉町、千代田町を経て館林市赤土町の国道122号との交点である「赤土町交差点」を終点とする路線で、1959(昭和34)年9月18日、群馬県より道路法に基づいて、路線認定された(太田市大字古戸-邑楽郡大泉町-千代田村-館林市成島、整理番号62、昭和34年群馬県告示第324~326号、1959年9月18日『群馬県報』号外)。

この路線の起点に当たる古戸交差点は、太田市の南東端に位置しており、東側は邑楽町と、利根川を挟んだ南側は埼玉県熊谷市とそれぞれ隣接しており、県・市内外からの交通の結節点になっているために交通量が多く、一日当たりの通行量は自動車約4.6万台に及ぶ上、周辺部に交差点が連続しているため、激しい交通渋滞を引き起こしているとともに、視認性も悪く、危険な状況となっていた。そのため、交差点を集約することで渋滞を緩和するとともに、視認性も向上し、より安全な通行を可能にするために、平成21年度から令和3年度の13年間をかけ、総延長1,050m、幅19.0~26.5mに亘る交差点改良事業が群馬県によって行われることとなった(群馬県太田土木事務所編『よくわかる公共事業 令和2年度県道古戸館林線交差点改良事業』)。この交差点改良によって、これまで埼玉県熊谷市方面から太田市方面にかけて最大渋滞長2km、通交に25分を要していたものが、渋滞は解消し、通交は4分に縮減されること、及び、平成14~18年平均で毎年105件程度発生していた交通事故件数が約50件程度にまで縮小することが期待されるということである。

工事対象地は、東は邑楽郡大泉町に、南は利根川を挟み埼玉県熊谷市(旧妻沼町)に隣接する利根川と石田川の合流点付近の標高約30mの低地に立地している。

工事対象地における埋蔵文化財包蔵の可能性から、平成29(2017)年5月10日付太土第922-1号によって、工

事を監理する群馬県太田土木事務所(以下、県太田土木事務所という)から群馬県教育委員会事務局文化財保護課(以下、県文化財保護課という)に宛てて、当該区間における埋蔵文化財試掘・確認調査の依頼があった。これを受けた県文化財保護課では同年5月17日に工事対象箇所における第1回目の試掘・確認調査を行い、洪水堆積物を掘り込む溝の存在を確認したため、同年5月19日、文財第706-5号にて、対象地の一部において発掘調査が必要である旨を回答した。

県太田土木事務所は翌平成30(2018)年2月28日付け太土第922-4号によって県文化財保護課宛、前回試掘・確認調査を行わなかった箇所についての埋蔵文化財試掘・確認調査を依頼し、これを受けた県文化財保護課は同年3月6日に2回目の試掘・確認調査を実施し、今回も遺構の存在を確認したため、翌3月7日付け文財第706-123号によって工事に先立って発掘調査が必要である旨が回答された。

これらの試掘・確認調査の結果を受けて、県太田土木事務所と県文化財保護課との間において、現状における遺跡の保存が困難であり、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置をとることが合意され、県太田土木事務所は令和元(2019)年10月31日付け太土第1455-1号にて太田市教育委員会に文化財保護法第94条の通知を提出した。これを受けて太田市教育委員会は同日、教文第1219号にて県教育委員会にこれを進達した。県文化財保護課の調整によって、現地における発掘調査は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、当事業団という)が実施することとなり、令和元年11月29日付け群理第50-2号により県太田土木事務所長と当事業団理事長の間で、令和元年12月1日~令和2年3月31日を履行期間とし、令和2年1月1日~令和2年1月31日の1ヵ月を発掘調査期間とする令和1年度一般県道古戸館林線社会资本総合整備(防災・安全)(交安・重点)事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査(比沙門遺跡)の委託契約が締結され、発掘調査が実施されることとなった。

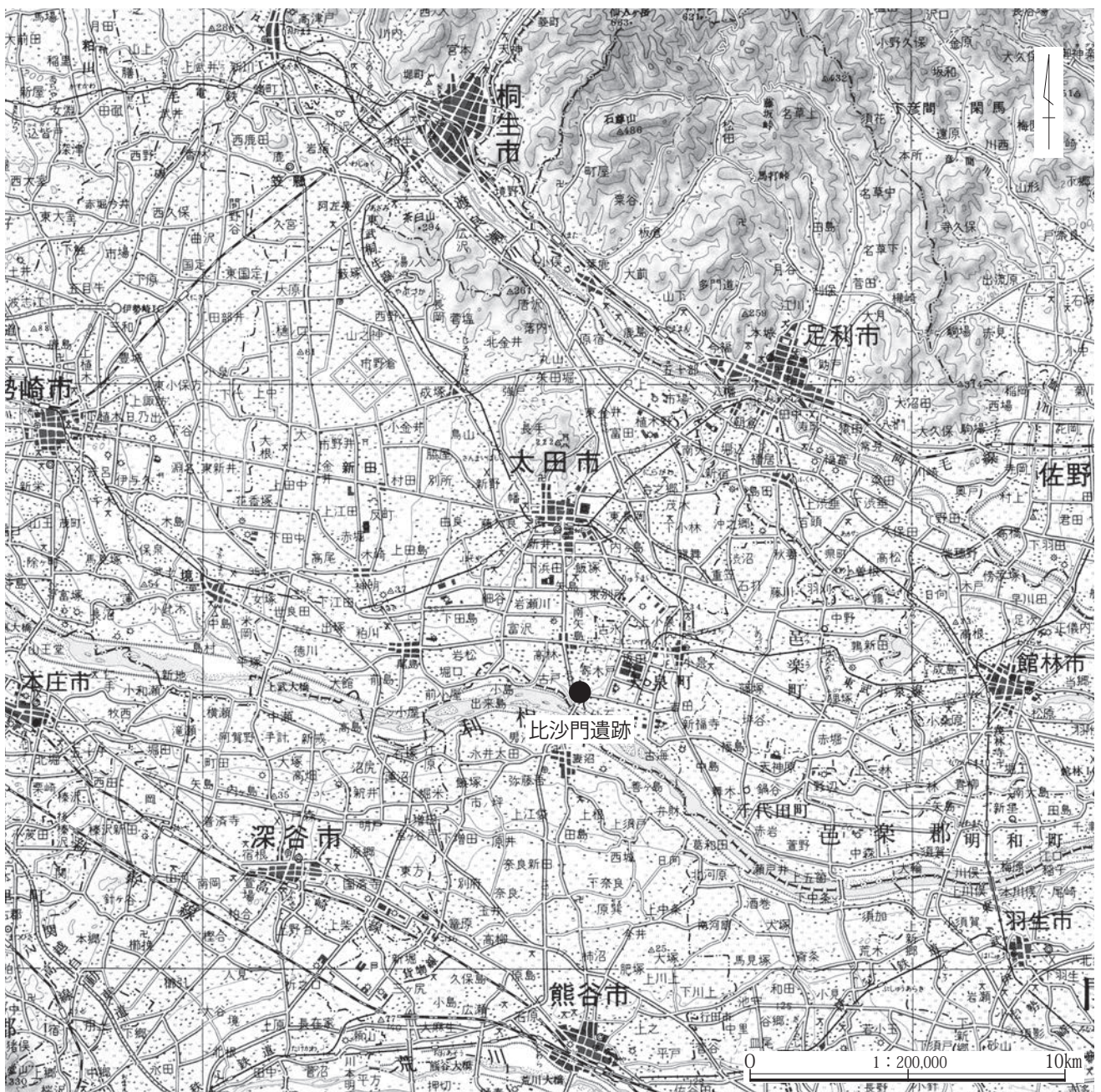
## 第2節 発掘調査の方法

### 1. 調査区と座標の設定

調査対象地は面積2,555.78㎡で、現在の生活道路及び用水路等によって4箇所に分断されていたので、東側から西側に向かって、順次、1～4区と命名した。東北東-西南西方向に直線的に伸びる総延長約105m・幅約2.5～2.8mの1～3区と、その北東隅に北東方向に取り付

く長さ約35m・幅3.5m前後の4区である。

遺構確認面が現地表面から約2～3m低かったため、調査区周囲の壁には法面を確保した上で調査を行ったため、実際の遺構確認面積は若干少なくなっている。調査面積が最も広いのが調査区全体の南西側に位置する1区で、面積は約2,100㎡で調査対象全体の約8割に当たる。その北東側に、北西-南東方向の生活道路を挟んで面積約320㎡の2区が隣接している。1区の南東側には北東-南西方向の生活道路を挟んで、小規模な三角形状を呈し、面積約30㎡弱の3区が位置している。2区の北東隅には北東-南西方向に細長い、面積約100㎡弱の4



第1図 遺跡の位置(国土地理院1/50,000地形図「深谷」平成26年7月4日を加工)

区が接している。これら大小4調査区の内、小規模な3・4区からは遺構は検出されなかったため、以下の記述では、1・2区における調査結果について言及することになる。発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=27200、Y=-40500」場合、「200-500」のように表記した。1～4区の調査区は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)のX=27220～27305、Y=-40490～-40582の範囲に、1区はX=27220～27265・Y=-40490～-40585、2区はX=27245～27275・Y=-40480～-40520、3区はX=27240～27250・Y=-40480～-40495、4区はX=27270～27305・Y=-40465～-40485の範囲にそれぞれ収まる(第5図参照)。

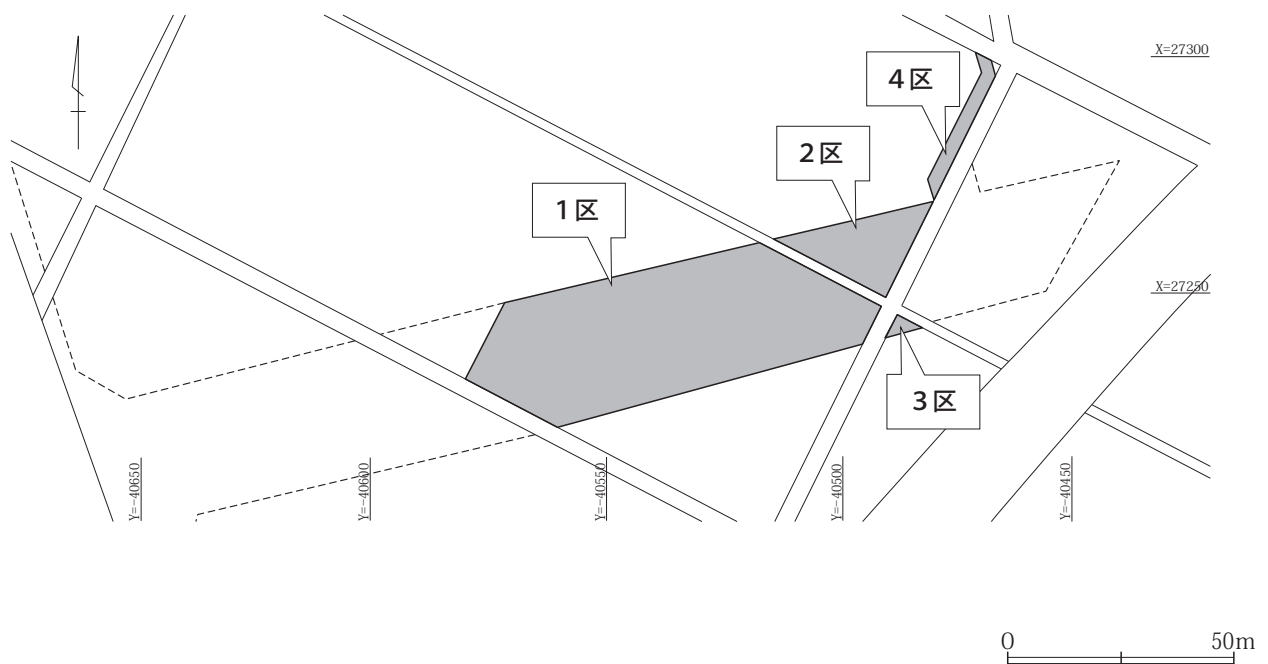
本報告書でも、遺構外出土遺物を含め、遺構・遺物の位置情報については、世界測地系の座標によって表記する。

## 2. 発掘調査の方法

調査は、まず1区の木の手伐採及び伐採した木の伐根、2区の草の刈り払い作業から行った。

表土掘削及び埋め戻しは、0.7m<sup>3</sup>バックホー・10tクローラードンプ等の重機を用いて行い、遺構確認のための平面精査及び遺構の掘削は、掘削作業員が行った。遺構掘削手順は、代理人に指示し、遺構の埋没状況の観察や写真撮影等は、調査担当が行った。遺跡全景を上空から撮影するため、空中写真撮影委託業者による撮影を令和2年1月23日に行った。遺構の土層堆積断面図や遺構平面図、出土遺物図等の図化は測量業者に委託して行った。

出土遺物は、遺物収納箱1箱分の土器・陶磁器・石器・石製品・金属製品等と、若干の木製遺物が出土した程度であった。



第2図 調査区位置図

### 3. 遺構測量

遺構等の測量は、遺構断面及び平面実測図とも縮尺1/20を基本とし、長大かつ広範囲わたる遺構を実測する際には、適宜・1/40・1/60などの縮尺とした。

遺構平面実測図の作成に当たっては、測量会社にデジタル測量を委託し、データ収録媒体及び打ち出し図面の提出を受けた。

遺構断面実測図は、原則として発掘現場においてアナログ実測されたものを元に、測量会社にデジタルデータ化を委託し、遺構平面実測図と同様、データの収録媒体およびデジタルデータによって作成された打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品およびアナログ実測された原図等は、調査記録として保存されている。

### 4. 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が分担して撮影した。主要な遺構については、中判カメラを用いてiso400モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影し、撮影記録はネガフィルムの状態で保存し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した。

また、発掘調査の過程で、調査の進捗状況の記録、及びすべての遺構について、デジタルカメラで撮影を行った。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、遺構全景等の撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について、検出および調査の状況について微細な接写を行っている。

調査区の全景写真等は、調査の進展にあわせて行い、併せてUAVによる空中写真撮影を業者に委託して実施した。

なお、撮影した写真のデジタルデータはHD等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

## 第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、令和2(2020)年1月1日から同年1月31日の1箇月間、2,555.78㎡を対象として実施された。工事対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であったが、平成29年5月17日に工事に先立って県文化財保護課による埋蔵文化財試掘・確認調査において遺構を確認したことによって、「比沙門遺跡(太田市遺跡番号T0485)」として太田市の遺跡台帳に登録された。試掘調査における遺構確認の状況から、工事対象地の東北側約半分が埋蔵文化財発掘調査による記録保存措置の対象となった。

発掘調査着手に当たって、調査区の西側に隣接し、発掘調査対象とはならなかった工事対象地内に発掘調査事務所を設置し、担当及び作業員の作業棟、休憩棟、器材庫とした。調査区の環境整備は、掘削作業員が行った。安全対策としてロープスティックとトラロープを用いて調査区全体を結界し、立ち入り禁止等の立て看板を設置し、安全確保を喚起した。

調査に際しては、低地部からの湧水が多いため、水中ポンプ(オートポンプ)を貸借し、常時排水を図った。また、掘削重機や、運搬用重機が、水路を通行する箇所には、水路保護の為、賃借した敷鉄板を敷設した。また、掘削作業員による掘削土の搬出等に不整地運搬車を使用した。

### 調査日誌抄

令和2年

- 1月4日 担当者2名着任、調査準備着手、届出書類等作成等事務。
- 5日 事業団本部で調査準備、事務。
- 6日 発掘調査現場に機材搬入。1区立木伐採。周辺環境整備、安全対策。
- 7日 1区立木伐採、周辺環境整備、安全対策等継続。1～3区調査区設定。
- 8日 1区立木処理。
- 9日 1区立木処理、周辺環境整備、安全対策継続。
- 10日 1区立木伐採継続、1区表土掘削、遺構確認精査。

- 14日 1区表土掘削、遺構確認精査継続、2・3号溝掘削調査。4区調査区設定。
- 15日 1区2・3号溝掘削調査継続。3・4区表土掘削遺構確認、遺構を検出せず、調査終了。
- 16日 1区4号溝掘削調査、1区遺構確認・精査。2区調査区壁精査・排水溝設定。
- 17日 1・2区排水溝設定、遺構確認精査。
- 20日 1区遺構確認精査継続。2区排水溝設定、遺構確認精査継続。
- 21日 1区遺構確認精査継続、1・3号溝掘削調査。2区排水溝設定、遺構確認精査継続、空中撮影準備。
- 22日 1区遺構確認精査継続、3・4号溝掘削調査継続。1・2区空中撮影準備。
- 23日 1区2号溝掘削調査継続。調査区全景写真撮影。
- 24日 1区4・9号溝掘削調査。2区5～8号溝掘削調査。
- 27日 1区5・6・9・11・12・13・15号溝、2区5・7・8・11・12号溝掘削調査。
- 28日 降雨のため作業休止。
- 29日 1区4・9・11～13・16・17号溝掘削精査、撤収準備。
- 30日 1区4・9・11～13・15・17号溝掘削精査、撤収準備。
- 31日 1区4、6・11号溝掘削精査。現場撤収。

## 第4節 整理作業の経過と方法

整理作業は、令和3年4月1日から6月30日までの3箇月間にわたって群馬県太田土木事務所の委託を受けて、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

出土遺物については、まず、報告書に掲載する土器・陶磁器類、石器・石製品類の選別を行い、土器・陶磁器類、石器・石製品類の写真撮影、接合・復元等の作業を実施した。次いで実測・トレース及び遺物観察表の作成を行い、業務を完了した。金属製品及び木製品は、報告書掲載資料の選別と錆落としの作業、応急的保存処理の作業

等を実施した上で、実測・トレースを行い、遺物観察表を作成して業務を完了した。遺構実測図については、まず調査区ごとに順次、各遺構の確認、遺構計測、遺構台帳の整備といった基礎作業とともに、遺構写真との確認作業を行い、その後、図面修正を進め、点検・整理の上、平面図及び土層断面図の編集及び修正、デジタル・トレース原図の作成、土層注記の編集等の作業を行い、デジタル原稿化を行った。

さらに、報告書に掲載する遺構写真を選定した後、レイアウト原案の作成、キャプション原稿の整備等を行い、レイアウト原案及びキャプション原稿及び、遺構写真図版頁のデジタル原稿化を図った。

これらの作業と並行して報告書本文の原稿の執筆を進めた。

それらを経て、デジタル化された遺構図面の校正、本文の原稿執筆及び報告書原稿の総合的なレイアウト等の作業、報告書原稿全体のデジタル組版及び編集作業を行った。

作成された原稿は、指名競争入札によって落札した業者に委託され、印刷・製本の業務を実施した。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行った。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物にかかる各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

参考文献(第1章)  
 群馬県2007『はばたけ群馬・県土整備プラン2008-2017』  
 群馬県2013『はばたけ群馬・県土整備プラン2013-2022』  
 群馬県2014『はばたけ群馬プラン・第14次群馬県総合計画・重点プロジェクト(平成26年4月1日改訂)』  
 群馬県県土整備部道路整備課(道路企画室)2013『群馬がはばたくための7つの交通軸構想』  
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2020『年報』39  
 群馬県ホームページ <http://www.pref.gunma.jp/>

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

比沙門遺跡は、太田市古戸町地内に所在する。東は邑楽郡大泉町に、南は利根川を挟み埼玉県熊谷市(旧妻沼町)に隣接している。利根川と石田川の合流点付近の低地に立地し、標高は30mほどである。

比沙門遺跡が所在する太田市は関東地方の北部、群馬県の南東部に位置し、北から延びる山地の南側、広大な関東平野に位置している。東京都心から北西に約80km、県庁所在地である前橋市からは東に約30km、高崎市からは同じく東に約40kmに位置する人口約22万人の市であり、群馬県内における市としては高崎市、前橋市に次いで3番目に多い人口を擁する。県内では西に隣接する伊勢崎市とともに施行時特例市に指定されている。

江戸時代には大光院の門前町及び日光例幣使街道の宿場町「太田宿」として賑わった。大正期以降はわが国を代表する軍需産業であった中島飛行機の、また戦後はその後身である航空機・自動車産業であるSUBARUの企業城下町である。

工業統計調査によると、平成25年の工業製品出荷額等は2兆3491億3099万円で全国13位であり、政令指定都市である広島市にも匹敵する規模となり、浜松市や京都市、北九州市といった政令指定都市を上回る規模を呈する北関東内陸工業地域を代表する工業都市である。

隣接する桐生市や栃木県足利市と共に両毛地域を形成する。1948(昭和23)年の市制施行当時の区域は旧新田郡。現在の市域は、旧山田郡・新田郡の区域で構成され、人口増加率は県内有数の伸びを示しており、県内第4位で人口約21万人を擁する伊勢崎市と僅かの差で拮抗し、両市とも人口は増加傾向にある。

市の中央部には金山・八王子丘陵が突出している。また、北西部を流れる渡良瀬川を隔てて北東側が栃木県足利市との、また南側を西から東へと流れる利根川が南側の埼玉県熊谷市とのそれぞれ県境となっている。

太田市の地形は、市域の中央の東に位置する金山丘

陵(最高点は金山239m)、市域の北部からみどり市・桐生市に延びる八王子丘陵(最高点は桐生市の茶白山293.9m)とその周辺の台地・低地からなる平野から構成されている。市内の標高が南部、南西部、北東部、東部は標高約30~40mの低地、市街地付近など中央部と西部、北西部は標高約40~70mであり、市街地北部に金山が聳え立ち、北西部の東武桐生線より東側から藪塚温泉付近にかけては標高約100~200m弱の八王子丘陵となっている。金山丘陵と八王子丘陵は、元々足尾山地と一体だったものが、断層が生じて谷となり、さらに大間々扇状地を形成していた渡良瀬川が流路を東に変えたため、現在のような地形になったと言われている。

八王子丘陵及び金山丘陵の西側には、渡良瀬川が第四紀更新世後期に形成した、大間々町を扇頂とする広大な大間々扇状地が広がり、扇端の湧水地帯には寺井・小金井・上野井・市野井・金井等の「井」の文字が付く地名が連なっている。その南方には宝泉(由良)台地が南に延びており、その周辺は沖積地となっている。

八王子丘陵・金山丘陵の東側には、2万4千年前頃から流れを東に変えた渡良瀬川が形成した渡良瀬川扇状地や旧河道・沖積地、渡良瀬川扇状地以前に形成されていた洪積台地の葦川台地がある。金山丘陵の南側では渡良瀬川が形成した台地と沖積地が広がり、利根川沿いの高林台地は邑楽台地へ続いている。

市内の最低点は、本遺跡の直ぐ南側に当たる古戸町利根川河川敷の地点で、標高約29mである。本遺跡は利根川堤防の内側に立地している訳ではないものの、河川堆積物である砂質土を基盤とする低地に立地している。

### 第2節 歴史的環境

太田市周辺には多くの遺跡があり、特に古墳時代には、東日本最大の規模を誇る前方後円墳である太田天神山古墳をはじめとする多くの古墳が所在する地域であり、東京国立博物館所蔵の国宝埴輪武装男子立像出土地としても知られており、また、市内では北関東自動車道、工業



第3図 周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課5万分の1都道府県土地分類基本調査(深谷)を一部加工)

団地、住宅団地、大規模商業施設など、各種の大規模開発が多く行われていることもあって、非常に多くの遺跡が発掘調査されている。

ここでは、それらの遺跡の内、本遺跡周辺の遺跡の状況を概観したい。なお、第4図に示した遺跡の範囲は、群馬県HP上で公開されているマッピングぐんま遺跡マップに依拠している。

### 1. 旧石器時代

本遺跡の周辺地域においては、これまで調査例は多くはなかったが、近年、国道354号線バイパスの建設に伴う発掘調査が継続的に行われ、いくつかの遺跡では旧石器が出土し、資料が増加している。

本遺跡の北西約3.5kmに位置する福沢新田遺跡(第4図範囲外)からは3点の縦長剥片が、北西約4kmに位置する細谷合ノ谷遺跡(第4図範囲外)からは黒曜石製ナイフ形石器が出土している。また、本遺跡の北西約3.3kmに位置する高林三入遺跡(第4図27、以下「第4図」は略す)からは石器ブロックが数箇所発見され、ナイフ形石器、石核、剥片等が計200点以上出土しており、本遺跡の北西約2kmに位置する高林西原古墳群(20)においても、3箇所の石器ブロックが確認されている。またこれらの遺跡の他、本遺跡から東南東約0.5kmに位置する仙石道祖遺跡(6)及び北東約3.3kmに位置する東別所遺跡(54)などが、旧石器散布地として遺跡台帳に登録されている。

### 2. 縄文時代

本遺跡周辺では、縄文時代遺物の散布地を含めた包蔵地は決して少ないわけではないが、発掘調査された遺跡の数自体は然程多くはない。

本遺跡の北西約1kmに位置する五庵遺跡(15)からは、草創期の爪形文土器が出土している。この五庵遺跡からは早期の撚糸文土器、中期後半の埋甕も出土している。早期の撚糸文土器は、他に、本遺跡の北側約100mに位置する古戸赤城遺跡(2)、本遺跡の北西約2.5kmに位置する小谷場古墳群(23)の範囲内からも出土している。また、本遺跡の北西約4kmに位置する細谷合ノ谷遺跡(第4図範囲外)からは後期中葉の竪穴建物、袋状土坑、埋甕などが検出された。また、本遺跡の北東約0.5kmに位置する宮下遺跡・和田遺跡(3)や、本遺跡の南東約

0.5kmに位置する仙石道祖遺跡(6)、そのさらに南東側に隣接する本遺跡の南東約1kmに位置する仙石専光寺付近遺跡(7)、本遺跡の北東約1.5kmに位置する毘沙門遺跡(8)、本遺跡の北東約2.4kmに位置する坂田遺跡(58)などが縄文時代遺物散布地として、遺跡台帳に登録されている。

### 3. 弥生時代

本遺跡周辺では弥生時代の遺跡の検出事例は少なく、そのこと自体がこの地域の特色とも言える。前掲の仙石道祖遺跡(6)では中期須和田式の土器片が数点、高林三入遺跡(27)からは後期の土器片が数点、それぞれ出土しているが、遺構は検出されていない。

### 4. 古墳時代

古墳時代になると本遺跡の周辺では人々の営みが急激に活発化してくるようになる。

群馬県地域における古墳時代前期を代表する土器である石田川式土器の標識遺跡となった石田川遺跡は本遺跡の北西約3.7kmに位置している(第4図範囲外)。1952(昭和27)年の石田川河川改修工事に伴う土取り工事を契機に発見され、発掘調査された集落遺跡で、ここから出土した東海系の特徴を有する土器の一群が「石田川式」と命名された。同じく、古墳時代前期の集落遺跡としては、本遺跡の北西約2.5kmに位置する高林遺跡(25)がある。1959(昭和34)年に明治大学によって発掘調査され、学史的にも良く知られている遺跡である。

本遺跡の周辺に所在する前期の古墳としては、まず、本遺跡の北西約3.6kmに位置する頼母子古墳(第4図範囲外)があげられる。墳丘は完全に削平され、痕跡をとどめないが、前方後円墳もしくは円墳であったと考えられ、銅鏃30点、三角縁神獣鏡を含む銅鏡3面等が出土している。これらの出土遺物から、太田市周辺では最初期に出現した古墳の1つと考えられている。

本遺跡の北西約2.5kmに位置し、高林遺跡(25)のすぐ西側に隣接する朝子塚古墳(24)も4世紀後半頃のものと考えられる前期古墳であり、国の史跡に指定されている。発掘調査されているのはごく一部であるが、全長約124mの大型前方後円墳である。

この朝子塚古墳の後、この地域では大型古墳の築造は



見られなくなるが、古墳時代中期末から後期にかけては、多くの群集墳が営まれるようになる。本遺跡の北西約2kmに位置する高林鶴巻古墳群(18)と高林西原古墳群(20)は一連のものと考えられる5世紀後半から築造された古墳群であり、全長約72mの沢野村74号墳や全長約56mの中原古墳等、大型の帆立貝形古墳を中核とした古墳群が形成された。この後、6世紀中頃から後半にかけて本遺跡の北北東約1.8kmに位置する東矢島古墳群(9)では6基の大型前方後円墳が継続して造営される。これらの古墳群の存在は、この地域にかなりの勢力を有した豪族が存在したことを示している。これらの古墳群の周囲には数多くの円墳も造営されており、7世紀まで継続して大規模な群集墳が形成された。

本遺跡の周辺には、本遺跡の北西約1.7kmの位置に6世紀前半から7世紀前半にかけて造営された高林不動古墳群(21)、本遺跡の北西約2.5kmには小谷場古墳群(23)が位置し、さらに前掲東矢島古墳群(9)の北西側、本遺跡の北西約1.45kmには前方後円墳1基と多数の円墳からなる西矢島古墳群(12)が所在する。

本遺跡の北側に展開する台地上は、早くから開発が著しいため、消滅してしまった古墳も少なくないことと予測されるので、詳細を把握することは困難であるが、この地域が群馬県内における有数の古墳密集地帯であることは間違いないところであろう。

その他、本遺跡からやや離れた地域を含めば、本遺跡の北西約6.3kmに位置する6世紀代の藤阿久古墳群(第4図範囲外)、本遺跡の北北西約5.5kmに位置する後期の浜町古墳群(第4図範囲外)、6世紀後半から7世紀の円墳からなる本遺跡の北北東約5kmに位置する新井古墳群、北西約3.7kmに位置する岩瀬川古墳群(第4図範囲外)、同じく北西約3.7kmに位置する細谷古墳群(第4図範囲外)が位置しており、本遺跡周辺部における古墳の動向を考えると重要である。

古墳時代の集落は、本遺跡の北西約4kmに位置する細谷南遺跡(第4図範囲外)、約1.3kmに位置する梁場遺跡(17)などから検出されている。

なお、第1表の通り、本遺跡周辺における古墳時代遺物の散布地は非常に多く、本遺跡周辺において遺跡台帳に登録されている周知の遺跡及び埋蔵文化財包蔵地では、古墳時代のものが50箇所と最多になる。

## 5. 奈良・平安時代

本遺跡所在地は、奈良・平安時代には邑楽郡の郡域に当たっているものと考えられる。太田市街地を南北に貫流し、本遺跡の北西約0.7kmで石田川と合流する八瀬川が古代の新田郡と邑楽郡との境と考えられているので、本遺跡の所在地は、律令制下には邑楽郡と新田郡との郡境に至近の場所ということになる。

古代の邑楽郡は、『和名抄』名古屋市立博物館所蔵本では「ヲホラキ」と訓が付けられている。上野国南東端の一带に位置しており、現在の太田市東部のごく一部と大泉町、千代田町、明和町、館林市、板倉町一帯が該当すると考えられている。池田(いけた)・疋太(ひきた)・八田(やた)・長柄(ながら)の4郷からなる下郡で、河川に挟まれた低湿地帯に立地する。本遺跡の地は長柄郷に当たる。

邑楽郡の史料上の初見は、『続日本紀』神護景雲3(767)年4月27日条に邑楽郡人外大初位上小長谷部宇麻呂など15人に大伴部の姓を賜るとの記事であるが、藤原宮跡出土の木簡削屑に「大荒城評胡麻□」と記されたものが見えるので、和銅6(713)年5月に諸国の郡郷名に好字を付けよとの命令を受けて「邑楽」の文字が当てられるようになったものと考えられている。実際、平城宮跡出土の木簡には「邑楽□[郡カ]」と記されたものがある。

また、前橋市元総社町において、当事業団が牛池川河川改修に伴う発掘調査を実施した際に、国府の存在を示唆する「国厨」「曹司」「厨」などと記された墨書土器とともに、「邑厨」と記された墨書土器が出土した。邑楽郡家の厨家を意味する文字であり、国府で行われた儀礼に際して邑楽郡家の厨家が動員されたことを示している。さらに、本遺跡の南東約0.7kmに位置する大泉町仙石の仙石専光寺付近遺跡(7)からは、「上邑厨」と記された墨書土器が出土している。「上野国邑楽郡厨家」を意味する文字と解釈することが出来、これもまた、邑楽郡の郡家に関わる文字と考えられる。

邑楽郡の郡家については、考古学的には全く検証されていないが、遺存地名から見て、古くから太田市と大泉町の境に近い、本遺跡の北東約2.5kmに位置する「古氷」地区に当てる説が有力である。現在の「古氷」の地名が「古郡」に通じることや、宝亀2(771)年10月に武蔵国が東山



第4図 周辺遺跡分布図

(国土地理院1/25,000地形図「足利南部」平成30年4月1日、「上野境」令和2年12月1日、「深谷」平成29年8月1日、「妻沼」平成29年)4月1日を加工

第1表 周辺の遺跡

	遺跡	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世	種別・概要	文献
1	比沙門遺跡(T0458)					○	○		溝	本報告書
2	古戸赤城遺跡(T0025)		○						散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
3	宮下遺跡(O110)・和田遺跡(O111)		○		○	○			散布地、集落、古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
4	西原遺跡(O119)				○	○			散布地、集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
5	篠原遺跡(O112)				○	○			散布地、集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
6	仙石道祖遺跡(O113)	○	○	○	○	○	○		散布地、集落、城館、古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
7	仙石専光寺付近遺跡(O115)		○	○	○	○			散布地、集落、生産遺跡	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
8	毘沙門遺跡(O108)		○		○	○			散布地、集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
9	東矢島古墳群(T0018)				○				集落、古墳	太田市教委編『市内遺跡』VI 2000
10	東矢島遺跡(T0228)				○	○			集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
11	向野遺跡(T0231)				○	○			集落	太田市教委編『埋蔵文化財発掘調査年報』6 2006
12	西矢島古墳群(T0209)				○				古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
13	東矢島廃寺					○			寺院	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
14	条里制水田想定地(T0237)					○			水田	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
15	五庵遺跡(T232)		○		○				集落	太田市教委編『市内遺跡』IV 2009
16	高林不動遺跡(T0436)				○				集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
17	梁場遺跡(T0233)				○	○			集落	太田市教委編『市内遺跡』X 高林梁場遺跡』1994
18	高林鶴巻古墳群(T0028)				○				古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
19	高林本郷遺跡(T0452)				○	○			散布地、古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
20	高林西原古墳群(T0029)				○				古墳	太田市教委編『埋蔵文化財年報』3・5 1993・1995、群馬県埋文事業団編『高林西原古墳群』2006、同『高林西原古墳群(2)』2013
21	高林不動古墳群(T0030)				○				古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
22	小谷場遺跡(T0026)				○				集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
23	小谷場古墳群(T0378)				○				古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
24	朝子塚古墳(T0027、国史跡)				○				古墳	太田市教委編『市内遺跡』XVI 1990、同『埋蔵文化財年報』3 1993、太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
25	高林遺跡(T0035)				○				集落	太田市教委編『市内遺跡』X 高林梁場遺跡』1994
26	条里制水田想定地(T0430)					○			水田	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
27	高林三入遺跡	○			○				集落	群馬県埋文調査事業団編『高林三入遺跡・八反田遺跡』2005
28	高沢遺跡(T0229)				○	○			集落	太田市教委編『埋蔵文化財発掘調査報告書』3 1993、同『市内遺跡』X 1994、同『埋蔵文化財発掘調査年報』5・6 1995・1996
29	高林城跡(T0326)						○	○	城館	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
30	条里制水田想定地(T0210)					○			水田	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
31	矢島城跡(T0024)						○		城館	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
32	宮西遺跡(T0216)					○			集落	太田市教委編『市内遺跡』III 1987、同『埋蔵文化財調査年報』4 1994
33	飯塚条里制水田跡(T0201)					○			水田、その他	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
34	北明泉寺遺跡(T0202)					○			集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
35	飯塚古墳群(T0014)				○				集落、古墳	太田市教委編『埋蔵文化財年報』1991
36	条里制水田想定地(T0200)					○			水田	太田市教委編『市内遺跡』III 1987、同『埋蔵文化財調査年報』4 1994
37	宮前遺跡(T0023)					○			集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
38	条里制水田想定地(T0225)					○			水田	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
39	条里制水田想定地(T0197)					○			水田	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
40	新井古墳群(T0198)				○				古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
41	新井館跡(T0364)						○		城館	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
42	御庵稲荷山古墳(T0015)						○		古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
43	小舞木遺跡(T0208)			○	○	○		○	集落、その他	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
44	天神山古墳(T0008)				○				古墳	太田市教委編『市内遺跡』VIII 1999
45	中島遺跡(T0204)				○	○			散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
46	大道端環濠遺構(T0356)						○		城館	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
47	内ヶ島古墳群(T0012)					○	○		集落、古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
48	塚塚遺跡(T0205)				○				散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
49	内ヶ島屋敷跡(T0365)						○		城館	太田市教委編『埋蔵文化財発掘調査年報』6 1996
50	川向・中西田遺跡(T0203)				○	○			集落、墳墓、その他	太田市教委編『市内遺跡』IV(2次)・V・VI 1988・1989・1991
51	北原遺跡(T0407)								集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
52	運動公園内遺跡(T0207)				○				集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
53	内ヶ島南田遺跡(T0022)				○				集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
54	東別所遺跡(T0213)	○							散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
55	東別所西原遺跡(T0211)				○				散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
56	東別所本郷遺跡(T0212)					○			集落	太田市教委編『埋蔵文化財発掘調査年報』5 1995
57	松下遺跡(O105)			○					散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
58	坂田遺跡(O106)		○		○	○			散布地、集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
59	川入遺跡(O107)				○	○			散布地、集落、古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
60	八反田遺跡(T0226)						○		その他	群馬県埋文調査事業団編『高林三入遺跡・八反田遺跡』2005
61	飯玉遺跡					○			散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
62	推定東山道駅路(武蔵路、T0227)					○			道路	太田市教委編『新野脇屋遺跡群発掘調査報告書』2010
63	家前遺跡(T0218)				○				散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
64	岩瀬川遺跡(T0219)					○			集落	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
65	道灌谷戸遺跡(T0351)				○				散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
66	北松島遺跡(T0350)				○				散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
67	鳥屑遺跡(T0349)				○				散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
68	今井屋敷跡(T0363)						○		城館	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
69	塚畑遺跡(T0406)					○			集落	群馬県埋文調査事業団編『塚畑遺跡・宮内遺跡・稲荷前遺跡・三島木遺跡・城ノ内遺跡』2006
70	下小林車塚古墳(T0427)				○				古墳	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996
71	下小林上遺跡(T0426)				○				散布地	群馬県埋文調査事業団編『庚塚遺跡・上・電遺跡』1980
72	杉ノ下遺跡(T0352)				○				散布地	太田市編『太田市史 通史編 原始・古代』1996

\* 上記全遺跡について、群馬県「マッピングぐんま 遺跡マップ」(<http://mapping-gunma.pref.gunma.jp/pref-gunma-iseki/Portal>)を参照した。

道から東海道に所管替えになる前の東山道駅路武蔵路に近い場所に位置していることなどから、郡内最西端とも言える場所に郡家が存在したと考えられている。

長元3(1030)年上野国不與解由状案(所謂『上野国交替実録帳』)諸郡官舎項の邑楽郡には正倉・庁屋・館等の記載があり、それら郡家の主要建物が無くなっていることが示され、11世紀前半段階には邑楽郡家は、他郡と同様、ほぼ壊滅的な状況であったことが知られるのである。

東山道駅路の分岐路である武蔵路は邑楽郡内を通り、国境の利根川を渡って武蔵国へと入ったのである。雑令要路津済条には主要な幹線道路には津済を置く規定がある。『延喜式』兵部省式には上野国内の水駅の設定は見られないが、この武蔵路が宝亀2年までは駅路の一角であり、それ以降、駅路ではなくなってからも上野国と武蔵国とを結ぶにとどまらず、広域行政区画である東山道と東海道とを結ぶ幹線交通路として重要な役割を担っていたことには相違ないので、津済として渡し舟・曳舟か、あるいは架橋、舟橋(浮舟)が設けられ頻りに行き来がなされていたであろうことは間違いない。

現在のところ、邑楽郡内においては東山道駅路武蔵路の遺構そのものは確認されていない。本遺跡の北東約3kmに位置する八反田遺跡(60)において東山道駅路武蔵路の遺構検出が試みられたが、道路遺構の検出には至らず、まだこの地域においては武蔵路の位置は確定していない。

津済の場所についても全く不明であるが、武蔵国への渡河点である津済は、邑楽郡家の推定地である邑楽町仙石の古氷地区に近く、また、中世以来の利根川渡河の要所であり、現在も刀水橋が架かって群馬・埼玉両県に亘る主要な交通路が通る本遺跡所在地周辺である太田市古戸町周辺に存在していた可能性が高いものと考えられている。津済には休憩や宿泊のための施設である布施屋、津済の管理施設、倉庫群や作業小屋等が立ち並び、他所では見られないような賑わいのある光景が展開されていたであろうことが推測される。本遺跡所在地の周辺は、古代においてそのような場所であった可能性が高いことは、本遺跡の性格を考える上で、重要な点であろう。

本遺跡の北約1.75kmの位置には古代寺院遺跡である東矢島廃寺(13)が所在する。古代における交通の要衝の地であり、郡家にもほど近い位置に古代寺院が建立されて

いることは何ら奇異ではないが、瓦の出土が知られるのみで、遺構については全く不明である。

古代の集落遺跡としては、本遺跡の北東約1~2kmに位置する向野遺跡(11)、本遺跡の北東約0.7kmに位置する五庵遺跡(15)、本遺跡の約4kmに位置する細谷八幡遺跡(第4図範囲外)、同じく細谷南遺跡(第4図範囲外)などが調査されている。

『朝野群載』22に掲載されている長和4(1015)年の上野国から武蔵国への返抄には、武蔵国藤崎荘の田畠が邑楽郡管内に入れられ数代を経ているので境界を決定したいことが述べられており、利根川の流路が変わったことで上野・武蔵の国境に変化があったことが知られるのである。

## 6. 中世

建久3(1192)年の『神宮雜書』の中に「邑楽御厨は往古の建立なり」とあることから、すでに平安時代には邑楽郡西部を中心に神宮領邑楽御厨が成立していたものと考えられる。正平15(1360)年の『神鳳抄』には「邑楽御厨布五十段歩十六丁」とあり、56町の田数で布50反を納めていたとされる。このように中世には、邑楽郡の西部は邑楽御厨に、その他は佐貫荘に入った。佐貫荘は、永仁元(1293)年に伊豆山権現に寄進されている。

『吾妻鏡』元暦元(1184)年条には佐貫広綱の名がみえる。赤岩郷(現・千代田町)の佐貫四郎広綱は、平家追討の功によって地頭職に補されると、文治4(1188)年に現在の館林市南部に当たる青柳に館を構え、その一族郎党は佐貫荘内に威を振るった。地藏信仰板碑としては県内最古といわれる千代田町赤岩の光恩寺の文永8(1271)年銘板碑や、鎌倉時代の作と推定される半丈六の阿弥陀三尊像、板倉町岩田の円満寺観音堂本尊千手観音像などはいずれも佐貫氏一族の寄進にかかるものと伝えられる。室町期になるとこの地域においては、佐貫氏の支族である舞木氏、さらにはその被官であり、同じく佐貫氏の支族と称する赤井氏などが台頭する。

享徳5(1456)年1月27日、岩松持国は足利成氏より下野佐野荘、武蔵太田荘の敵を討つために当地への出陣を命じられている(「足利成氏書状写」正本文書)。

その後、当地は長尾氏が支配するところとなり、さらにその長尾氏も小田原北条氏の圧迫を受けて下野国足利

荘に退去し、邑楽郡域は小田原北条氏の支配下に入ったのであるが、天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原攻めにより、北条氏による邑楽・新田郡地域の支配にも終止符が打たれたのであった。

後述するように本遺跡は中近世の溝跡群が検出された遺跡であるが、本遺跡の周辺にはいくつかの中世城館遺跡が点在している。ただし、その殆どは発掘調査されておらず、全容が不明なものが多い。

本遺跡の南西約0.5kmに位置する仙石道祖遺跡(6)に含まれる仙石城(岡山城)が、本遺跡に最も至近の中世城館遺跡と言える。15～16世紀ごろの居館で、堀、土居、戸口、帯郭などの存在が指摘されているが、発掘調査されてはいない。

また、本遺跡の北西約2.5kmに位置する高林城跡(29)は、16世紀の城館と考えられ、『矢内文書』、『後閑文書』、『清水文書』、『永禄日記』等に見えるが、現状は工場敷地となり、完全に消滅してしまっている。

本遺跡の北北東約3kmに位置する矢島城跡(31)も16世紀の城館と考えられ、堀や土居などの遺構が東西2箇所に見られるものの残存状態は良くない。

本遺跡の北約5kmに位置する新井館跡(41)は14～16世紀頃の城館と考えられ、堀の痕跡などが若干遺るが、残存状態は良くない。

本遺跡の北西約4.4kmに位置する内ヶ島屋敷跡(49)は、12世紀頃の居館と考えられ、堀、土居などのごく一部の痕跡が僅かに確認出来る。鬼門には観音堂があり、『正樹文書』に見える。残存状態は良くない。

本遺跡の北東約5kmに位置する今井屋敷跡(68)は、12～14世紀に亘る居館で、『永禄日記』に見える。1984年に県営住宅団地の建設に先立って当事業団によって発掘調査され((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1985)、堀などの遺構が検出され、磨白など多数の遺物が出土した。現状では消滅してしまっている。

本遺跡の北西約5kmには大道環濠遺構(46)が位置している。二重の堀がめぐる居館とされているが、残存状態は悪く、詳細は不明である。

本遺跡の北東約3.1kmに位置する小泉城(第4図範囲外)は、本遺跡周辺の中世城館遺跡としては最も著名な遺跡である。邑楽台地の北西部に位置しており、方約100m規模の本丸と方約300mの二の丸とを回字状に巡ら

せ、その外側に総曲輪をおく構造で、堅固な構えをとっている。毛呂権蔵の『上野国志』には「結城氏朝併長子七郎持朝父子結城戦場に戦死す。持朝が子、小太郎持光逃れて上州甘楽郡富岡に隠れ、富岡主税介と号す。延徳元(1489)年己酉始て小泉に城を築いて移住す。」と見えるが、真偽のほどは不詳なるも、結城氏系の人物による築城の可能性は十分に考えられる。城主富岡氏に関わる記録は「富岡家文書」として遺る。それらによると富岡氏は、永禄5(1562)年から同10(1567)年にかけては上杉氏に従っていたことが判明するが、永禄12(1569)年8月には富岡家当主富岡清四郎秀親は北条氏政から「上郷」支配を任されており、さらに天正12(1584)年6月14日には北条氏直から館林領・新田領内の所領21箇所を宛行われており、小田原北条氏に従っていたことがわかる。ちょうどこの時期は、北条氏による上野国の支配体制がほぼ確立した時期に該当しており、小泉城に拠った富岡氏による支配も、北条氏支配下において確立したものと考えられ、堅固に修築した城構はこの時期に北条氏系の城郭修築技術によって整備されたものと考えられている。

## 7. 近世

天正18(1590)年、徳川家康の重臣である榊原康政が上野国邑楽・勢田及び下野国梁田の3郡の内の10万石の知行を宛行われ、館林城を居城として入封した。邑楽郡域周辺における近世幕藩体制の確立である。榊原康政は入封直後に検地を行っており、天正19(1591)年のものとして田島村(現・明和村)等の検地帳が遺っている。また榊原康政は、文禄4(1595)年に利根・渡良瀬両川の築堤を命じており、湖沼の干拓も同時に進められ、新しい村がつけられていった。近世初期には下野国安蘇郡に属していた除川村(現・板倉町)の開発記録(飯塚文書)によれば、全国各地から浪人が集まり、定住していった様子がうかがえる。

寛永2(1625)年、榊原氏館林藩3代藩主である榊原忠次は、邑楽郡東部にある板倉沼周辺の湿地帯(内蔵新田)開発の功により1万石を加増されたが、寛永20(1643)年、榊原氏の転封によって旧館林藩領が幕府領となった約7ヵ月間、館林城は上野國小幡藩主織田信昌、下野国大田原藩主大田原政清、上野国七日市藩主前田利意らが交互城番を勤めている。

正保元(1644)年、松平(大給)乗寿が6万石を宛行われ館林藩に入封、大給松平氏が2代に亘って藩主をつとめるが、寛文元(1661)年には4代将軍徳川家綱の弟である綱吉が25万石で入封したが、綱吉は定府大名で、実際には館林の地に赴任していない。徳川綱吉が藩主であった寛文年間に下野国都賀郡・安蘇郡との国境変更があり、数箇村が邑楽郡に編入されている。「寛文郷帳」では、邑楽郡は全郡が「館林宰相殿領分」で74村、高57865石6斗余、うち田方25103石4斗余・畑方32762石1斗余であった。

延宝8(1678)年、4代将軍家綱の死去に伴って、弟の館林藩主徳川綱吉が将軍職を継承すると、綱吉の嗣子で僅か1歳の徳松丸が館林城主とされたが、天和3(1683)年、徳松丸の死去によって館林城は廃城となり、藩領は幕府の領するところとなった。その後、綱吉藩主時代の藩領の一部は、宝永4(1707)年、改めて置かれた館林藩領に復している。

現在の邑楽郡域は、天和2(1682)年以来、旗本の相給地が多い。「元禄郷帳」では、邑楽郡全郡で村数85、高78,965石余。多い村では20人も旗本に分知されている。「天保郷帳」では村数85、高80504石余。「旧高旧領取調帳」では村数92、高80503石余、うち旧幕府領と旗本領の岩鼻支配所分が高44445石余、館林藩領が32732石余であった。

本遺跡が所在する太田市古戸地区は、旧・古戸村の範囲に入っており、利根川の左岸に位置し、近世までは邑楽郡に属した。西は新田郡高林村、対岸南は武蔵国幡羅郡妻沼村(現・埼玉県大里郡妻沼町)、北は寄木戸村(現・邑楽郡大泉町)、東は仙石村(現・同上)である。古くから上武両州を結ぶ交通の要地で、南北に古戸道が貫き、古戸渡で妻沼村と結ばれた。また利根川縁には古戸河岸があった。

古戸村は、「寛文郷帳」では田方72石余・畑方445石余で、館林藩領であった。天和2(1682)年の分郷配当帳では、高452石余分が旗本山岡領などの4給。「元禄郷帳」では山岡領などの5給。近世末期の「御改革組合村高帳」でも同じく5給で、家数39であった。

延宝8(1680)年には利根川対岸の台村・妻沼村(現・妻沼町)と河原地の境相論が起り、現在の石田川にあたる「古利根川」(蛇川とも)が境界となっている(「境論

裁許状」『内田文書』)。明和元(1764)年の「武州熊谷宿助郷村高帳」(埼玉県立文書館蔵)では、中山道熊谷宿(現・埼玉県熊谷市)の増助郷村となっている。

利根川河畔の当村は、度々、洪水の被害を受けている。寛保2(1742)年の洪水では、逃げ遅れた80余人が鎮守の長良明神の榎の大木に取りついて助かったといい(「大洪水記録謄本」『関口文書』)、安政3(1856)年の大洪水では、都合76間の土堤が崩れたという(「堤築立入用助成願」『赤石文書』)。

### 第3節 基本土層

先述した通り、本遺跡は、利根川と石田川の合流点付近の低地に立地し、標高は30mほどで、洪水堆積物を掘り込む溝が15条検出された。

基本土層は、1区の東半の北隅付近の壁で基本土層1を記録した。1・2区では、各溝の土層断面にこれら基本土層が含まれているため、1・2区には、この1箇所しか基本土層は記録しなかった。

また、4区西壁北端で基本土層2を、4区西壁中央付近で基本土層3を、3区西壁中央付近で基本土層4をそれぞれ記録している。

遺構確認はV層上面において行った。V層については、県文化財保護課による試掘調査時の所見で「FP泥流か」と指摘されたものである。しかしながら、地元、太田市文化財保護課の担当者の意見では、当該地域における他の遺跡において確認されているFP泥流では、FPの軽石がもっと多く含まれているが、本遺跡におけるV層においては殆どFP軽石が含まれていないので、様相が異なることであった。これらのことから、V層は「FP泥流」ではなく、8世紀以降の洪水堆積物であると考えられる。

II層にやや多く含まれる白色の軽石はAs-Aと考えられるが、V層とII層との間にAs-BあるいはB混土的な層は確認出来なかった。天仁元(1108)年のAs-B降下以降に、大きく土地が改変されている可能性がある。時期的には、溝の出土遺物の年代観から、中近世のものと考えられる。

4号溝以西では、II層はほぼ欠落している。近現代に削平を受けている可能性が高い。また、4号溝以西では、

IV層も部分的にしか検出されず、III層が直接V層の上に堆積しているところが多く、削平を受けている可能性が高い。

V層は、1区南西部と、2区北東部において堆積が認められない部分が存在した。ただし、元々堆積しなかった訳ではなく、後世の耕作等により攪乱されてしまったものと考えられる。III層が深い位置にまで堆積しており、その下層がVI層となっている状況である。

洪水堆積物であるV層の直下には旧地表が遺っているものと考えられる。このため、V層の下面に水田や畑の遺構が存在した可能性を考え、排水用に調査区の周囲を一段深く掘削したサブトレンチの断面をすべて確認したが、畦畔や畝サク状のものは確認できず、V層直下には

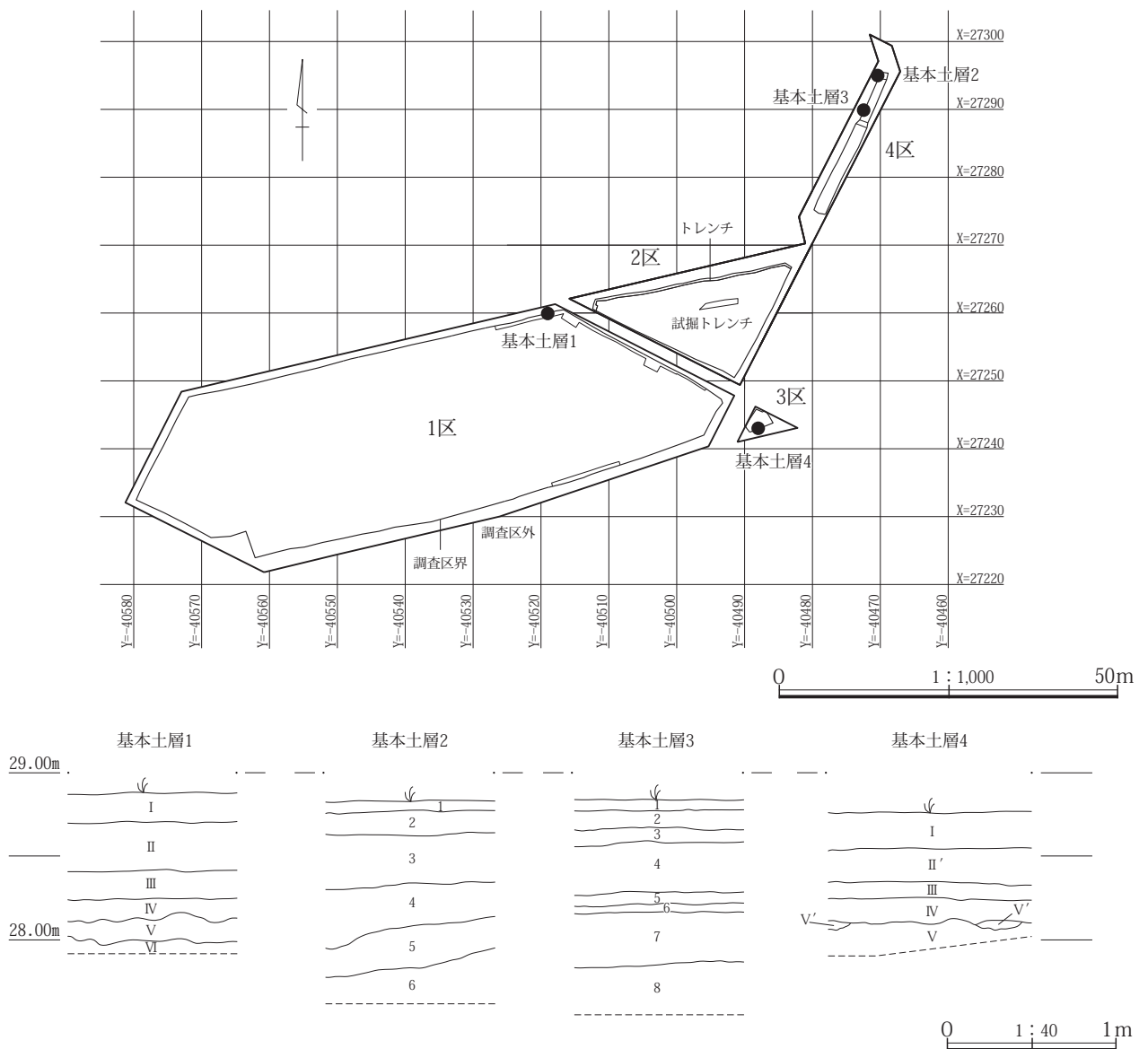
遺構は無いものと判断した。

また、3区では西壁で基本土層4を記録した。

4区では基本土層2・3を記録した。基本土層2の地点からうっすらとV層が確認出来たため、確認レベルを上げてV層付近で遺構確認を行ったが、遺構は検出されなかった。なお、基本土層2・3は、1区で確認した基本土層1や3区で確認した基本土層4との対応関係が不明確であったため、1区基本土層1、3区基本土層のようなローマ数字は使わずアラビア数字を付して表現した。

**基本土層1 (1区北壁)**

I 灰黄褐色土(10YR4/2) 径約1mm程度の白色軽石を



第5図 基本土層図

少量含む。斑点状の鉄分沈着あり。表土、水田耕作土。

- II 暗褐色土(10YR3/4) 径約1mm程度の白色軽石をやや多く含む。I層との境界に厚さ約10~15mm程度の鉄分凝集層あり。径約5mm程度のマンガン粒をやや多く含む。
- III 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性やや強い。径約1mm程度の白色軽石を極少量含む。鉄分の沈着弱い。
- IV 暗褐色土(10YR3/3) 径約1mm程度の白色軽石を極少量含む。III層との境界に厚さ約15~20mm程度の鉄分凝集層あり。径約3~5mm程度のマンガン粒をやや多く含む。
- V 鈍い黄褐色土(10YR5/4) 水成堆積物。斑点状の鉄分、マンガンの沈着やや多い。
- VI 褐灰色土(10YR4/1) 斑点状の鉄分、マンガンの沈着やや多い。湧水著しい。

#### 基本土層2(4区西壁北端)

- 1 灰黄褐色土(10YR4/) しまり非常に弱い。表土、現水田耕作土。
- 2 暗青灰色土(10BG3/1) グライ化。粘性強い。表土、水田耕作土。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR4/3) 粘性強い。弱い斑点状の鉄分沈着あり。
- 4 暗褐色土(10YR3/3) 斑点状の鉄分沈着少量、マンガン粒やや多い。
- 5 暗褐色土(10YR3/3) 6層ブロックを少量含む。湧水著しい。
- 6 黄褐色土(10YR5/8) ローム層。湧水あり。

#### 基本土層3(4区西壁中央付近)

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり非常に弱い。表土、現水田耕作土。
- 2 暗青灰色土(10BG3/1) グライ化。粘性強い。表土、水田耕作土。
- 3 鈍い黄褐色土(10YR5/3) 径約1mm程度の白色軽石を少量含む。斑点状の鉄分沈着少量。
- 4 鈍い黄褐色土(10YR4/3) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量。
- 5 褐色土(10YR4/4) 6層ブロックを少量含む。斑点状の鉄分沈着少量。

6 黄褐色土(10YR5/6) 水成堆積物。

- 7 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量。
- 8 暗褐色土(10YR3/3) 斑点状の鉄分沈着やや多い。

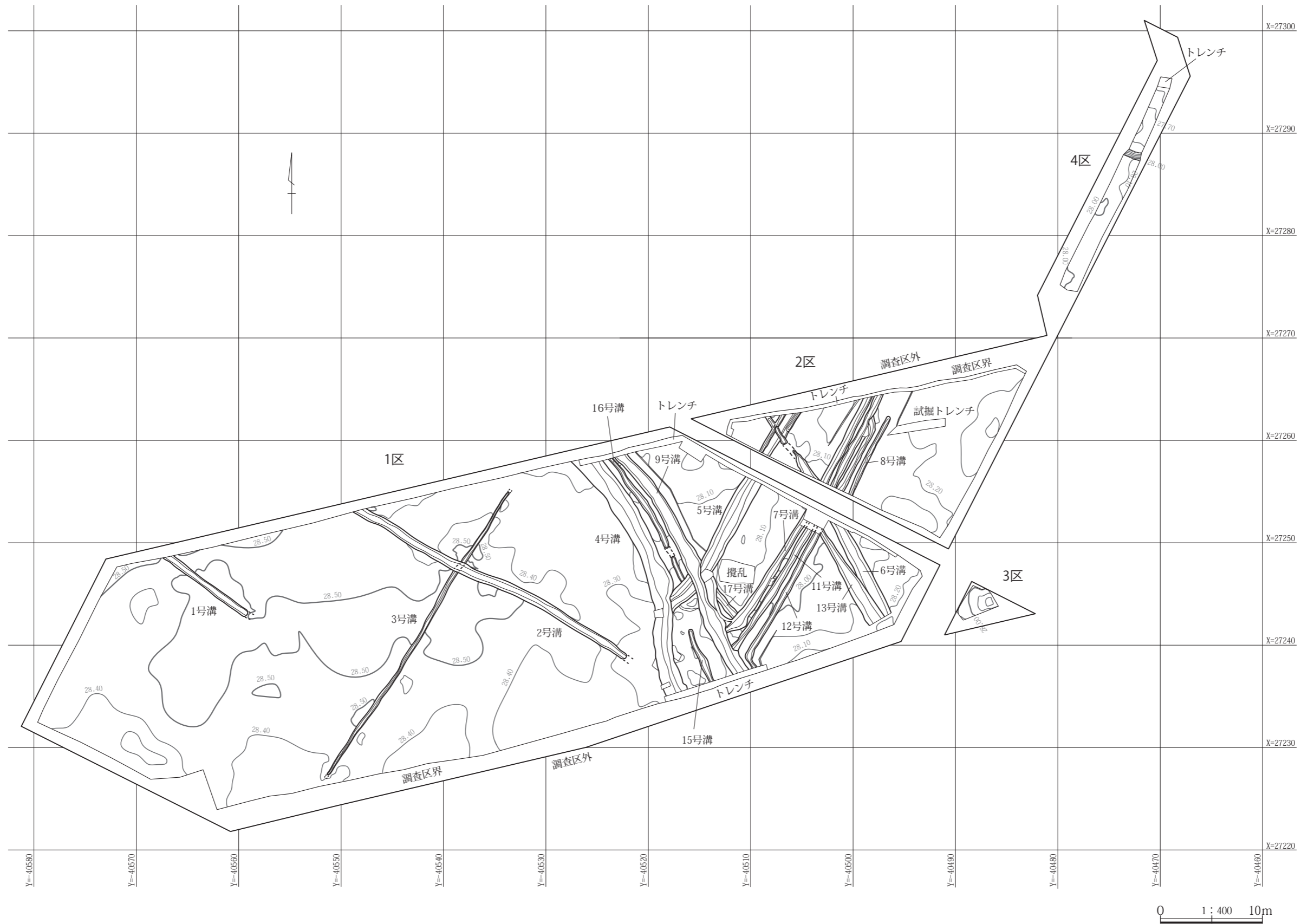
#### 基本土層4(3区西壁中央付近)

- I 灰黄褐色土(10YR4/2) 径約1mm程度の白色軽石を少量含む。斑点状の鉄分沈着あり。表土、水田耕作土。
- II' 鈍い黄褐色土(10YR4/3) 径約1mm程度の白色軽石を少量含む。I層との境界に厚さ約10~15mm程度の鉄分凝集層あり。径約5mm程度のマンガン粒やや多い。
- III 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性やや強い。径約1mm程度の白色軽石を極少量含む。II層との境界に淡い鉄分凝集層あり。
- IV 暗褐色土(10YR3/3) 径約1mm程度の白色軽石を極少量含む。III層との境界に厚さ約15~20mm程度の鉄分凝集層あり。径約3~5mm程度のマンガン粒やや多。
- V' 黒褐色砂(10YR3/1) 水成堆積物。局所的。径約1mm以下の細砂。V層を直接覆う。
- V 鈍い黄褐色土(10YR5/4) 水成堆積物。斑点状の鉄分、マンガンの沈着やや多い。

#### 参考文献(第2章)

青木裕美ほか2012 『戦国史—上州の150年戦争—』 上毛新聞社  
太田市1996 『太田市史 通史編 原始古代』  
角川日本地名大辞典編纂委員会編1988 『角川日本地名大辞典10 群馬県』  
京都大学文学部国語学国文学研究室編1968 『諸本集成倭名類聚抄』本文篇  
臨川書店  
熊谷市2018 『熊谷市史 通史編上巻 原始・古代・中世』  
群馬県編1938 『上毛古墳総覧』  
群馬県教育委員会1988 『群馬県の中世城館跡』  
群馬県教育委員会編2017 『群馬県古墳総覧』  
群馬県史編纂委員会編1981 『群馬県史』資料編3  
群馬県史編纂委員会編1986 『群馬県史』資料編2  
群馬県総務部市町村課編2015 『平成27年度群馬県市町村要覧』  
群馬県文化事業振興会編1985 『上野国郡村誌』11  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1985 『浜町屋敷内遺跡B地点』  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2005 『高林三入遺跡・八反田遺跡』  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2006 『塚畑遺跡・宮内遺跡・稲荷前遺跡・三島木遺跡・城ノ内遺跡』  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2006 『高林西原古墳群』  
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2013 『高林西原古墳群(2)』  
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2020 『年報』39  
館林市2011 『館林の遺跡と古代史 館林市史 資料編1 原始古代』  
館林市2015 『館林の原始古代・中世 館林市史 通史編1』  
山崎一1972 『群馬県古城址の研究』下 群馬県文化事業振興会  
マッピングぐんま・遺跡まっぷ  
<http://mapping-gunma.pref.gunma.jp/pref-gunma-iseki/Portal>





第6図 全体図

## 第3章 発見された遺構と遺物

本遺跡は、利根川や石田川の合流点付近の低地にあり、今まで幾度となく洪水を受けていると考えられる。遺構確認を行った洪水堆積物の中からは、8世紀代の土師器坏などが出土したが、その時代の遺構は確認出来なかった。

調査区は、既存の道路や水路によって4箇所に分割されており、西側から1区～4区とした。

1区と2区から洪水堆積物を掘り込む15条の溝を確認した。全長が検出されたものは1条もなく、いずれも調査区外へと伸びているか、あるいは上面の削平によって検出されなかった部分が存在するかどうかである。

1区で1～7・9・11～13、15～17号溝の14条、2区で5～8・11・12号溝の6条であるが、2区において検出された溝のうち、8号溝を除いてはいずれも1区から検出された溝の北側に続く部分である。すなわち、5～7・11・12号溝は1～2区にまたがって検出されているのである。なお、10・14号溝は欠番とした。

1区は、中央やや東から検出された4号溝を境として、東側において遺構検出のレベルが低くなっており、4号溝を隔てて東側において遺構の密集度が高い。

4号溝は、他の溝と比較し規模が大きく、この遺跡内の主体的な水路として整備された溝の可能性が考えられる。この4号溝からは、陶磁器類を中心に瓦や木製品などが出土し、出土遺物の年代観から、近世のものと考えられる。また、4号溝は、北西から南東へ流れる中、中央付近から南西側縁辺に11本の木杭列を検出した。残存状態の良い2本を断ち割りし取り上げたところ、丸木を利用し先端に加工が施されていた。どちらも長さが約1m以上あり、地中深く打ち込まれていた。土留めなどの目的で設置したものと想定出来る。

4号溝以外の溝については、遺物の出土が殆どないため、遺構の年代を特定することは難しいが、出土遺物や溝の埋没土の様相から、ほぼ中・近世のものと考えられる。ただし、互いに重複する溝もあり、数時期にわたり掘削されたものと考えられる。

3区は北東－南西方向に走行する生活道路を隔てて東

側に隣接する、約20㎡にも満たない小三角形の調査区である。V層上面まで掘削し、面的に遺構確認を実施したが遺構は全く検出されなかった。

4区は2区の北東端に北東－南西方向に取り付く道の拡幅部分に当たる長さ約30m・幅3.5m前後の細長い調査区である。調査区の幅が狭く、遺構確認面まで掘削すると法面を設けなければならぬために調査可能な部分は幅1.8m以下になってしまうために、0.7㎡のバケツ幅を基準としたトレンチ状の調査となった。

4区の北には、現集落が広がっており微高地となっている。4区は、その微高地と低地の接点部分と言える。

調査区北側では、V層の堆積がなく、どこを遺構確認面とするか難しい状態であったため、深く掘り下げていったところ、最北部でローム層を検出した。このローム層の堆積は北から南に向け傾斜しており、急激に南に向け落ちていることを確認した。基本土層2はこのローム層の確認出来た箇所において記録した。この地点よりも南側では、湧水が著しく、掘削や遺構確認は非常に困難で、ローム層を追いかけることは出来ず、任意のレベルで掘削を続け、遺構確認をしたが、結果的に、遺構・遺物は確認されなかった。また、基本土層2を記録した地点では、薄っすらとV層が確認出来たため、確認レベルを上げてV層付近で遺構確認を行ったが、それでも遺構・遺物は全く検出されなかった。

以下では、1・2区から検出された各遺構について述べる。なお、各遺構から出土した中近世陶磁器・土器類の図版は、写真図版頁に一括して掲載した。また、各出土遺物の詳細については、第4表遺物観察表も併せて参照されたい。

### 1. 1号溝(第7図、PL. 2)

**位置** 1区の北西寄り。X=27242～248、Y=-40559～567。

**重複** なし。

**主軸方位** N-53°-W。

**規模** 検出全長9.65m、上幅0.57～0.76m、下幅0.34～

0.48m、深さ0.10～0.19m。

**埋土** 径約1mm程度の白色軽石を極少量含み、厚さ約15～20mm程度の鉄分凝集層があり、径約3～5mm程度のマンガン粒をやや多く含む暗褐色土(10YR3/3)を主体とし、斑点状の鉄分とマンガンの沈着がやや多い鈍い黄褐色土(10YR5/4)のブロックを多く含む。

**遺物** なし。

**所見** 1区の北西隅付近を南東—北西方向に走向する。北西端は調査区外へと延びており、南東端はX=27243・Y=-40559付近で検出出来なくなるが、この地点で溝が止まっている訳ではなく、単に、上面が後世に削平を受け、破壊されてしまったために結果的に検出されないだけのことで、溝自体は南東側へとさらに伸びていた可能性が高い。

周辺における検出面の標高は28.45～56mで、地形的には南東側から北西側へと緩やかに傾斜している様子が窺える。溝自体も、南東端溝底の標高は28.46m、北壁際溝底の標高は28.29mで、南東側から北西側へと緩やかに傾斜していたもの考えられる。埋土中に鉄分の凝集とマンガンの沈着が見られることからみれば水流の存在は想定出来なくもないが、砂土やヘドロ状土の堆積物等が無いため、明確ではない。

**時期** 中近世のものと考えられる。

## 2. 2号溝(第8図、PL. 2・3)

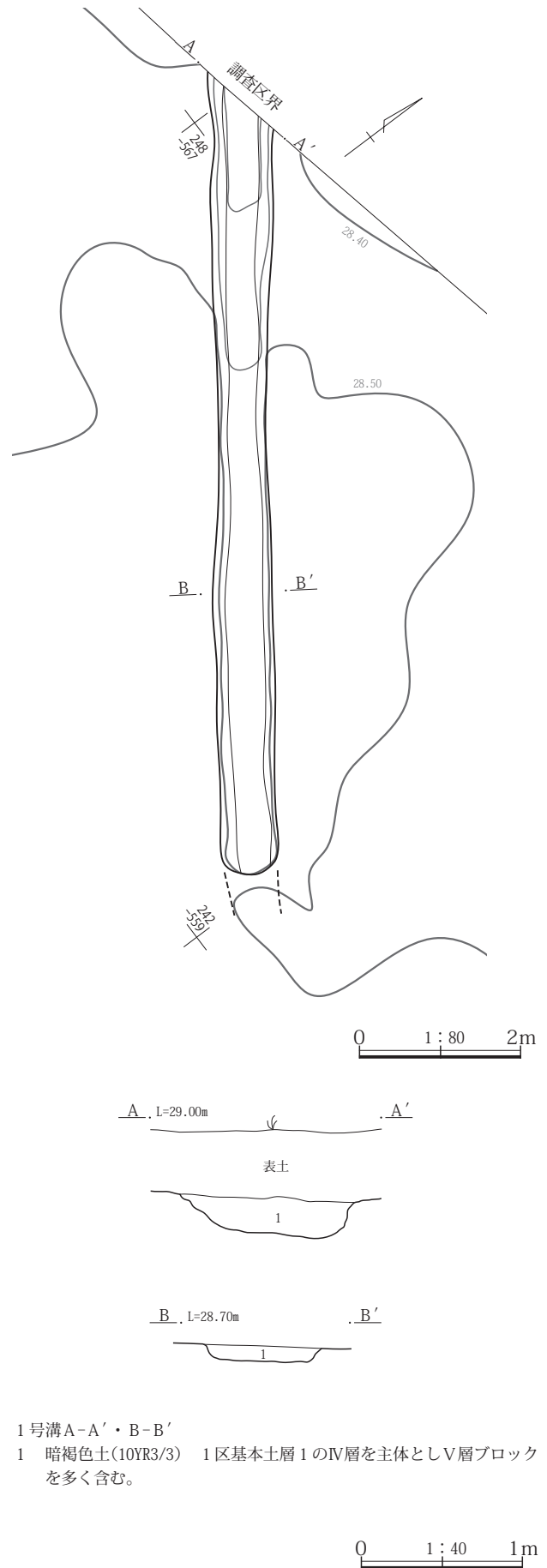
**位置** 1区の中央。X=27238～253、Y=-40522～548。

**重複** 中央より北西に寄った位置で3号溝を掘り込んで分断している。

**主軸方位** N-60°-W。

**規模** 検出全長30.29m、上幅0.63～1.10m、下幅0.32～0.59m、深さ0.07～0.22m。

**埋土** 径約1mm程度の白色軽石を極少量含み、厚さ約15～20mm程度の鉄分凝集層があり、径約3～5mm程度のマンガン粒をやや多く含む暗褐色土(10YR3/3)を主体とし、斑点状の鉄分とマンガンの沈着がやや多い鈍い黄褐色土(10YR5/4)のブロックを多く含む土をベースとし、壁際の一部において、径約1mm程度の白色軽石を極少量含み、厚さ約15～20mm程度の鉄分凝集層があり、径約3～5mm程度のマンガン粒をやや多く含む暗褐色土(10YR3/3)を主体とし、斑点状の鉄分とマンガンの沈着がやや多い鈍



第7図 1号溝

い黄褐色土(10YR5/4)のブロックをやや多く含む土が薄く堆積している。

**遺物** なし。

**所見** 1区の中央付近を1号溝に並行するかのように南東-北西方向に走向する。1号溝の北東側約13mに位置している。北西端は1号溝と同様、調査区外へと延びており、南東端は $X=27238.5 \cdot Y=-40522$ 付近で検出出来なくなるが、1号溝と同様、この地点で溝が止まっている訳ではなく、単に、上面が後世に削平を受け、破壊されてしまったために結果的に検出されないだけのこと、溝自体は南東側へとさらに伸びており、調査区南壁でも断面が確認されている。南東側についても調査区外へと溝が伸びていたことは確実である。

先述した様に、中央より北西に寄った位置、 $X=27242.5 \cdot Y=-40538.5$ 付近で3号溝を掘り込んで分断しているが、埋土はどちらも1区基本土層1のIV層を主体としており、両溝にはそれぞれの時期差はないものと考えられる。

周辺における検出面の標高は28.33~53mで、地形的には平坦に近い。溝底の標高も28.23~29m、概ね28.25m前後で平坦である。埋土中に鉄分の凝集とマンガンの沈着が見られることから、1号溝同様、水流の存在は完全には否定しきれないが、砂粒やヘドロ状土の堆積物等は無いため、流水の痕跡は明確ではない。また、溝底の標高は南北で殆ど格差がないため、流水を仮定した際の流下方向は全く不明である。

**時期** 中近世のものと考えられる。

### 3. 3号溝(第9図、PL. 3)

**位置** 1区の中央。 $X=27227 \sim 254, Y=-40533 \sim 551$ 。

**重複** 中央より北東に寄った位置で2号溝に掘り込まれ、分断されている。

**主軸方位** N-33°-E。

**規模** 検出全長32.80m、上幅0.21~0.53m、下幅0.09~0.25m、深さ0.04~0.20m。

**埋土** 径約1mm程度の白色軽石を極少量含み、厚さ約15~20mm程度の鉄分凝集層があり、径約3~5mm程度のマンガン粒をやや多く含む暗褐色土(10YR3/3)を主体とし、斑点状の鉄分とマンガンの沈着がやや多い鈍い黄褐色土(10YR5/4)のブロックを多く含む土が堆積している。

**遺物** 非掲載であるが、埋土中から古代の土師器小型製品片が1点出土している。

**所見** 1区の西半付近を南西-北東方向に走向する。調査対象範囲の東側に寄った5・7・8・11・12号溝と走行が類似している。現状では、北東端は $X=27255 \cdot Y=-40533.5$ 付近で途切れてしまっているが、上面が後世に削平された結果、検出されなかっただけのことで、本来はより北東側へと続いていたものと考えられる。

同じく南東端も $X=27227.5 \cdot Y=-40551.8$ 付近で検出されなくなるが、同様と考えられる。ただし、調査区南壁の断面では明確に確認出来てはいない。

先述した通り、 $X=27242.5 \cdot Y=-40538.5$ 付近で2号溝に掘り込まれているが、埋土はどちらも1区基本土層1のIV層を主体としており、両溝にはそれぞれの時期差はないものと考えられる。

周辺における検出面の標高は28.37~45mで、地形的にはほぼ平坦に近い。溝底の標高も28.35~43m、概ね28.39m前後で平坦である。埋土中に鉄分の凝集とマンガンの沈着が見られることから、1・2号溝同様、水流の存在は完全には否定しきれないが、砂粒やヘドロ状土の堆積物等は無いため、流水の痕跡は明確ではない。流水があるとすれば、底面レベルから西から東に流下したのものと考えられるが、底面レベルにはほとんど差がない。

**時期** 中近世のものと考えられる。

### 4. 4号溝(第10~13図、PL. 3・4・9・10)

**位置** 1区の東寄り。9・15・16・17号溝の西側に近接し、ほぼ並行する。 $X=27234 \sim 258, Y=-40516 \sim 527$ 。

**重複** 5号溝の南西端を掘り込む。

**主軸方位** N-0~37°-W。

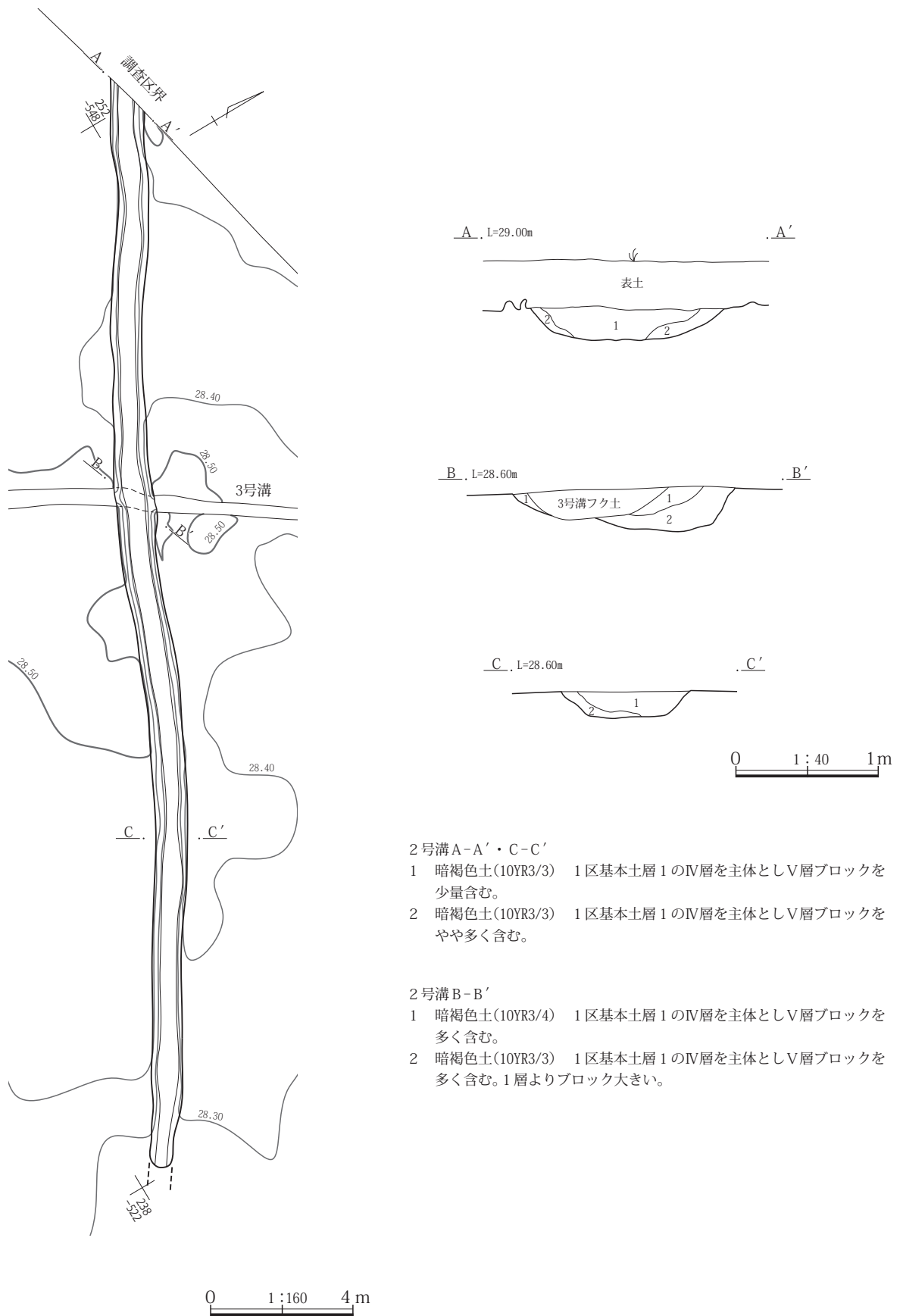
**規模** 検出全長21.80m、上幅1.62~2.37m、下幅0.31~1.45m、深さ0.57~0.75m。

**埋土** 4層に分層されているが、概ね1区基本土層III層に類似した粘性強い褐灰色土ベースとし、斑点状の鉄分が少量沈着する。底面の若干上には、径1~2mm程度の褐灰色の砂層が堆積し、水流の存在が推測される。

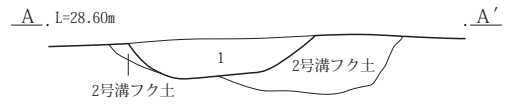
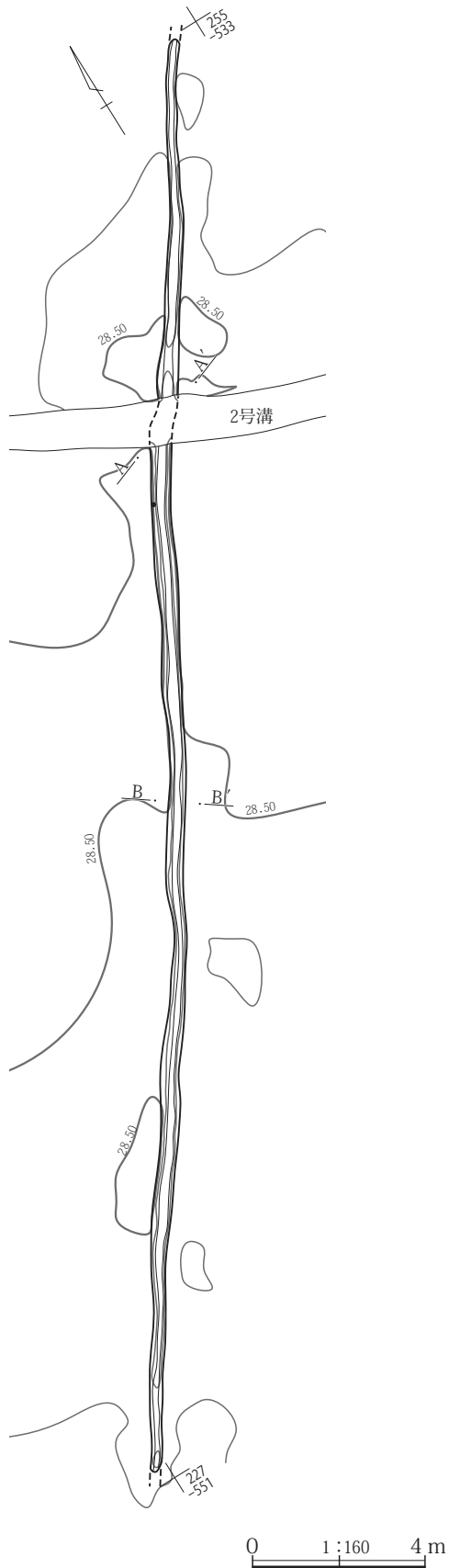
**遺物**

(1)木杭

5号溝との合流点以南の溝西岸斜面に約0.9m間隔で

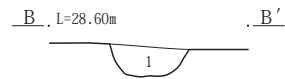


第8図 2号溝



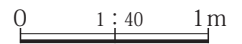
3号溝 A-A'

1 暗褐色土(10YR3/3) 1区基本土層1のIV層を主体としV層ブロックを少量含む。



3号溝 B-B'

1 暗褐色土(10YR3/3) 1区基本土層1のIV層を主体としV層ブロックを多く含む。



第9図 3号溝

土中に打ち込まれた状態で11本からなる杭列が検出された。護岸土留めのための施工と考えられる。これらの杭のうち、木質の残存状態が良好な杭2(1)と杭10(2)とを取り上げ、断ち割りし、断面観察を行った。どちらの杭も完形で、先端が加工された丸木であった。ただし、先端部は、遺存状態が悪く取り上げられなかった。どちらも長さ100cm以上であり、VI層に深く撃ち込まれていた。杭2は長さ119cm・径4.8cmで、節が多く見られ、杭の端部は切り落とされている。杭10は長さ121cm・径5cmで、やや曲がっており、端部は切り落とされ、上部はやや劣化している。

さらに北寄りのX=27252.4・Y=-40507.2付近で、単独で1本の杭が、溝底に刺さった状態で検出され、これを杭12とした。1本単独で検出され、溝底に近い位置であり、目的・機能不明である。調査範囲内においては、これら計12本の杭が検出されたが、杭以外の横木などは確認できなかった。

取り上げた杭2・10以外の杭も、すべて丸木である。先端部については掘削していないため不明であるが、おそらく同様な加工が施されていたものと推測出来る。

### (2)木製品

1区の北壁際、溝北端付近のX=2725.817・Y=-40524.999地点における溝底から10.4cm上から針葉樹製の曲物底板2/3片が1点出土した(3)。出土標高は27.764m。径29.7cm・幅12cm・厚さ1.5cmで、板目材を使用している。一部欠損しており、X線写真撮影で2箇所に打たれた木釘が僅かに確認出来た。

### (3)中近世陶磁器・土器類

中近世陶磁器・土器類は4～16の13点を採り上げた。4は溝北西部X=27255.361・Y=-40522.834地点の東壁に張り付いた状態で出土した在地系土器皿口縁部1/5～底部2/3片。出土標高は28.036mである。底部左回転糸切無調整。底部内面左回転の螺旋状轆轤目顕著。底部に焼成後の小孔3箇所所残る。江戸時代。

5は溝北西部X=27255.361・Y=-40523.149地点の溝底より28.1cm上から出土した十能瓦角部片。出土標高は28.001mで、断面中央黒色、断面灰白色、器表黒色。凸面は縮緬状痕、凹面は丁寧な撫で調整で、端部に沿って強い撫で。江戸時代から昭和にかけてのものと考えられる。

6は溝北西部X=27256.330・Y=-40523.449地点の溝東壁に取り付いて出土した碗かと思われる瀬戸・美濃陶器の底部片で、出土標高は27.87mで、高台端部を除き、内面から高台内まで鉄化粧風に薄い飴釉。底部内面周縁と高台脇の一部に釉溜り。江戸時代。

7は溝の中央部のX=27245.525・Y=-40518.658地点の溝底から28.8cm上から出土した瀬戸・美濃陶器徳利下半1/2片。出土標高は28.008m。外面は錆釉で体部外面下位以下を拭う。外面の体部下端から底部外面は回転篋削り。江戸時代。

8は溝の中央部から南寄りのX=27244.141・Y=-40517.879地点の東壁に取り付いて出土した在地系土器内耳鍋の口縁部片。出土標高は28.186m。器壁やや厚く、口縁部はやや伸長する。焼き上がり時に酸化炎。14世紀後半～15世紀中葉。

9は同じく溝の中央部からやや南寄りのX=27243.889・Y=-40518.247地点の溝底から48.1cm上から出土した肥前磁器染付皿の口縁部一部～底部1/6片。出土標高は28.141m。口縁部から体部内面は花唐草文、外面は唐草文。底部内面周縁は2重圏線、高台内は1重圏線。17世紀末～18世紀中葉。

10は溝の南寄りX=27243.219・Y=-40518.266地点の底面より52.5cm上から出土した在地系土器片口鉢口縁部片である。出土標高は28.185m。口縁の玉縁部のみ横撫で。体部内面は顕著な撫で。体部外面は指圧痕の凹凸残る。14世紀中葉。

11は溝の南寄りX=27242.545・Y=-40518.786地点の西壁に取り付いた状態で出土した在地系土器焙烙の口縁部～体部片である。出土標高は28.150m。断面はにぶい橙色、器表は暗灰色。外面中位に紐作り痕。外面下位は縮緬状痕と凹凸残る。江戸時代。

12は溝のほぼ中央部、5号溝との合流点付近のX=27245.637・Y=-40517.859地点の東壁に取り付いた状態で出土した瀬戸・美濃陶器の徳利底部片で、出土標高は27.961m。内面は無釉。外面は飴釉施釉後に体部下位いかの釉を拭う。釉は白濁する。江戸時代。

13～16はいずれも溝の埋土中から出土したものである。

13は肥前磁器青磁皿底部1/5片。内面は片彫りと線彫りによる施文後、高台端部を除き青磁釉。高台端部外面

は面取り。17世紀。

14は肥前磁器染付筒形碗口縁部～体部1/4片。外面に雪持ち竹。口縁部内面は2重圏線、底部内面周縁は1重圏線18世紀中葉～19世紀初頭頃。

15は肥前磁器染付碗口縁部一部～底部完存の破片。釉はやや濁り、染付が不鮮明。外面に雪輪梅樹文か。18世紀中葉から後葉。

16は渥美陶器壺か甕体部片。内外面撫で。12世紀。なお、他に、非掲載であるが、中世中国磁器片1点、近世国産磁器片22点、近世国産施釉陶器片11点、近世国産焼締陶器辺1点、近世在地系焙烙・鍋類片5点、その他の近世在地系土器陶器片1点、時期不詳の土器類片7点、時期不詳の瓦片10点等が出土している。

#### (4) 石製品

埋土中から砥沢石製の砥石片が17・18の2点出土した。

17は溝南部東壁際 X=27240.227・Y=-40518.166地点の埋土中、溝底より50.1cm上からの出土で、出土標高は標高28.131m。残存長5.8cm・幅2.5cm・重さ46.9gの小形の切り砥石である。背面側が研ぎ減っているが、残る砥面の形状は良好で、比較的丁寧に管理されていたものと見られる。

18は残存長6.3cm・幅3.6cm・厚さ2.6cm・重さ96.5gで、背面側は平坦な砥面となっているが、右側砥面は研ぎ減っていて、上端小口部や裏面側には切断痕が残り、段差が生じている。左辺は使用され部分的に研磨痕が残されているが、同種切断痕は見られない。

#### (5) 古代の土器

埋土中から出土した8世紀前半代と考えられる須恵器壺片19・20の2点を採り上げた。

19は胴部上位片で、胴部は内外面とも篋撫で、残存部上位に口縁部との接合痕が残る。

20は底部小片で、外面は篋撫で、内面は撫で。

なお、非掲載であるが本溝からは他に古墳時代後期の埴輪片3点、古代の須恵器大型製品片4点が出土している。

これら8世紀代の須恵器片や非掲載の埴輪片、須恵器片等は、遺構の年代と関わるものではなく、後世の流れ込みと考えられる。

**所見** 1区の東寄りの位置を蛇行しながら、9・15・16・17号溝などとほぼ並行して、北西～南方向に走行す

る。この溝を境として遺構の検出面のレベル差があり、西側が高く、東側が低くなっており、西側が微高地的な状況で、東側が低地と見られる。溝は、この微地形の転換点を境として、ほぼ南北方向にやや湾曲している。

4・9・16号溝SPAでは、Ⅲ層直下から掘り込みが確認出来た。9・16号溝は、Ⅳ層の下であるので、時期差があるものと考えられる。Ⅳ層は4号溝西側の肩部分には堆積は認められない。また、東側もⅤ層の高まりを挟んでⅣ層及び16号溝となっている。Ⅳ層が水田耕作土で、4号溝の東側を耕作しているものと捉えられる。規模が他の溝より大きいと、調査範囲で検出された溝の中では、メインの水路であった可能性が考えられる。

周辺における検出面の標高は概ね27.59～28.43m、溝底の標高は27.59～66mで、地形も溝底も北高南低であり、北西側から途中屈曲し、南側に向かって流れていたものと考えられる。

**時期** 中近世のものと考えられる。

### 5. 5号溝(第14図、PL. 4・5・10)

**位置** 1区の東寄りから2区の北西端にかけて。X=27243～263、Y=-40504～517。

**重複** 1区側の溝南西端付近で4号溝に合流している。2区側の溝北東端付近で6号溝を、また、1区側の溝南西端付近で9号溝をそれぞれ掘り込んでいる。

**主軸方位** N-28°-E。

**規模** 検出全長22.62m、上幅1.21～1.88m、下幅0.10～0.54m、深さ0.15～0.31m。

**埋土** やや砂質の灰黄褐色土(10YR4/2)主体で、斑点状の鉄分沈着とマンガン粒がともに少量見られる。

#### 遺物

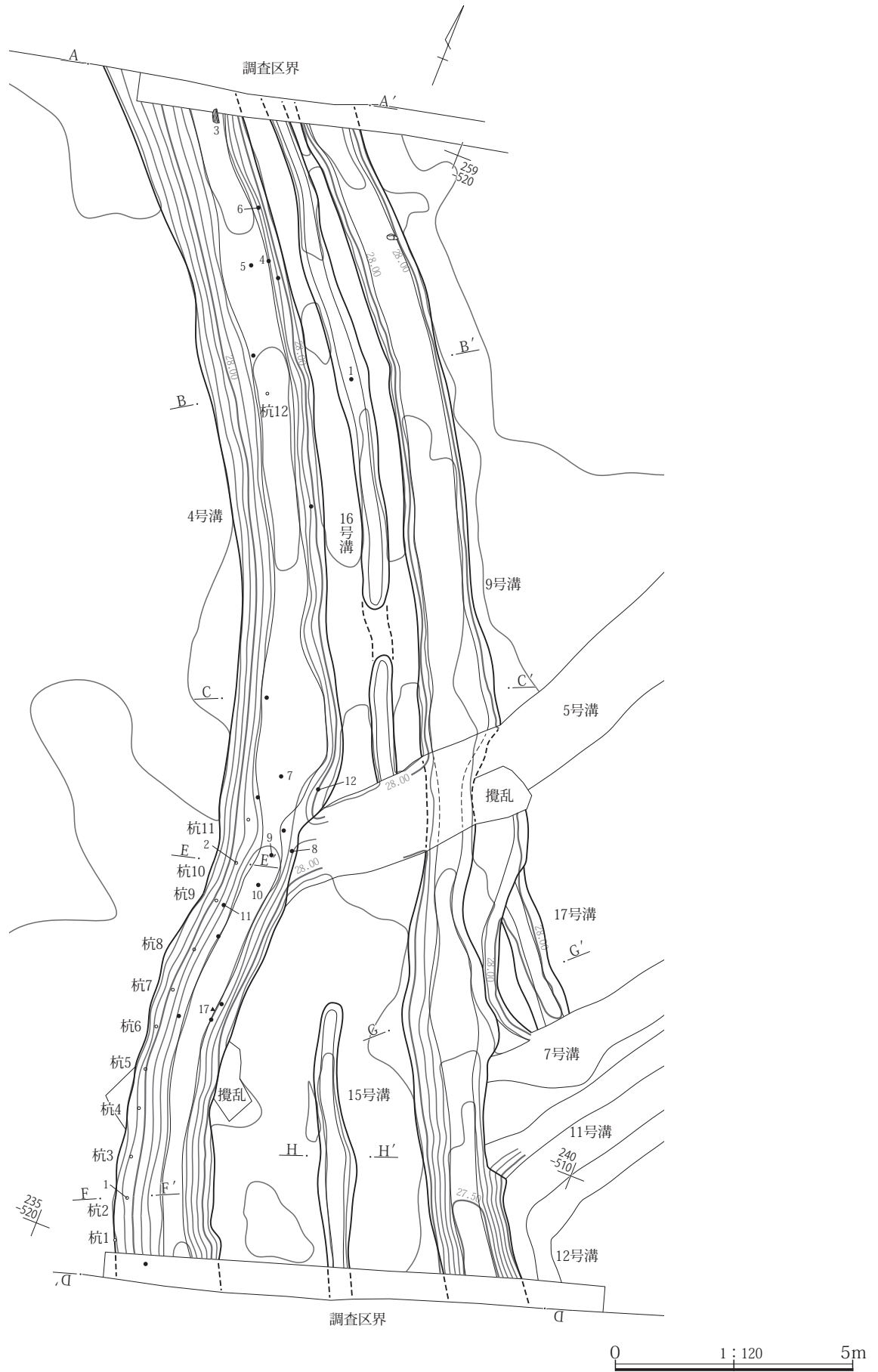
##### (1) 中近世陶磁器・土器類

1～3の3点を取り上げた。

1は溝南端部、4号溝との合流点付近、X=27262.205・Y=-40506.946地点の西壁に取り付けて出土した堺・明石陶器播鉢体部片である。出土標高は27.956m。体部外面回転篋削り。内面は使用により器表平滑。18～19世紀中葉。

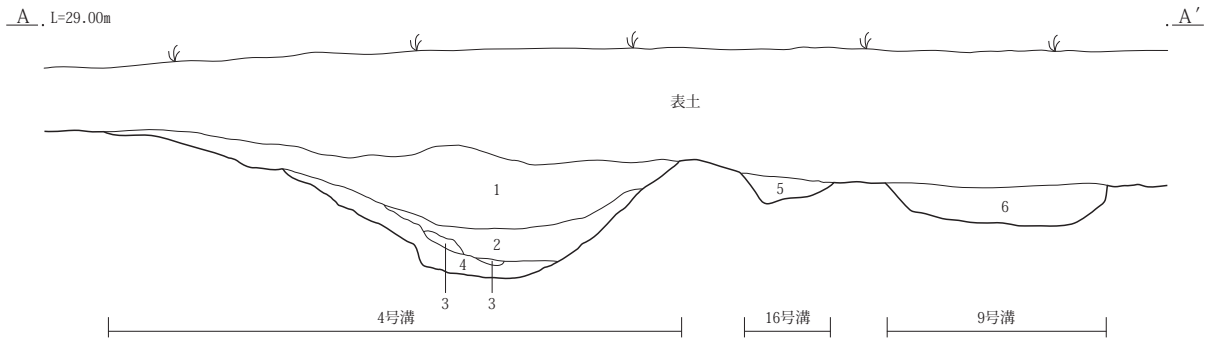
2は溝南端部、4号溝との合流点付近、X=27244.576・





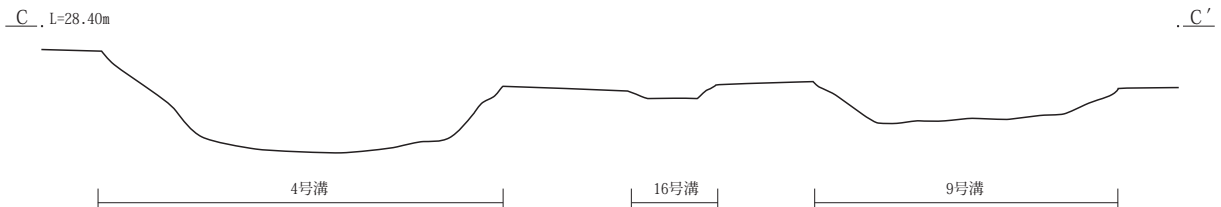
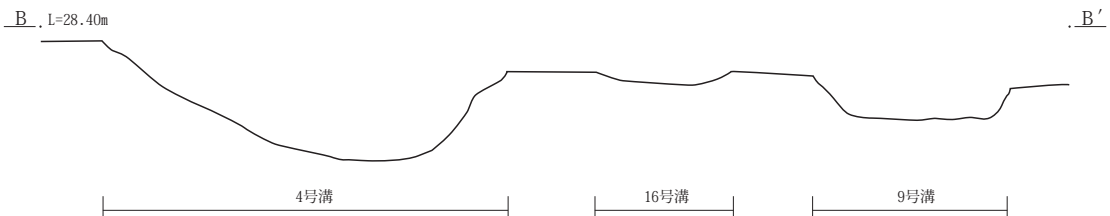
第10図 4・9・15~17号溝

4・9・16号溝

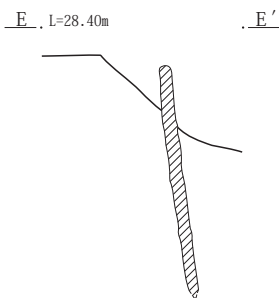


4・9・16号溝 A-A'

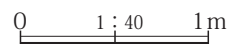
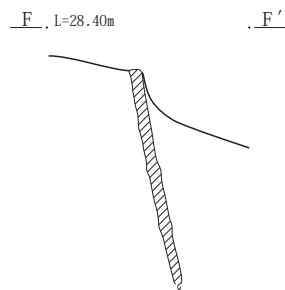
- 1 褐灰色土(10YR5/1) 粘性やや強い。斑点状の鉄分沈着やや多い。(4号溝覆土)
- 2 褐灰色土(10YR5/1) 粘性やや強い。斑点状の鉄分沈着少量。(4号溝覆土)
- 3 褐灰色砂(10YR4/1) 径1~2mmの砂。溝の西側の底面より若干上に堆積。(4号溝覆土)
- 4 褐灰色土(10YR5/1) 粘性やや強い。斑点状の鉄分沈着少量。(4号溝覆土)
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 斑点状の鉄分沈着マンガング粒少量。(16号溝覆土)
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 斑点状の鉄分沈着、マンガング粒多量。(9号溝覆土)



4号溝杭2



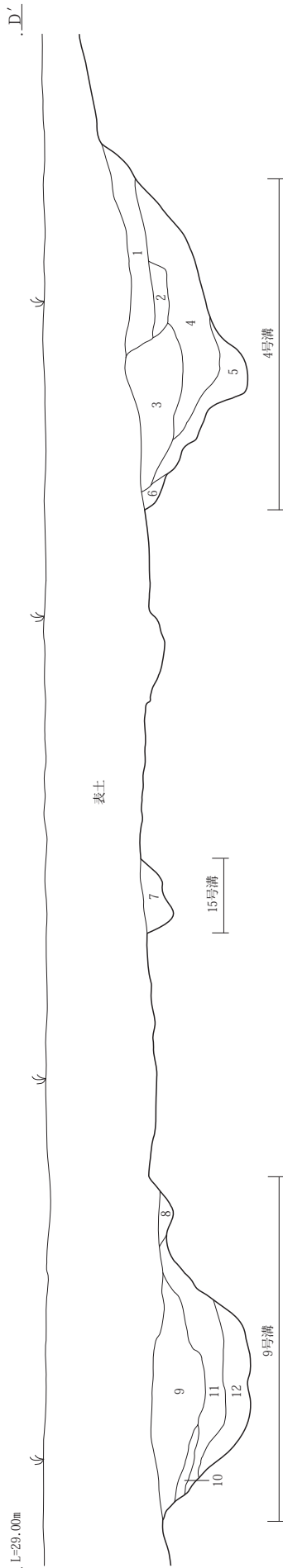
4号溝杭1



第11図 4・9・15~17号溝土層断面(1)

4・9・15号溝

D, L=29.00m

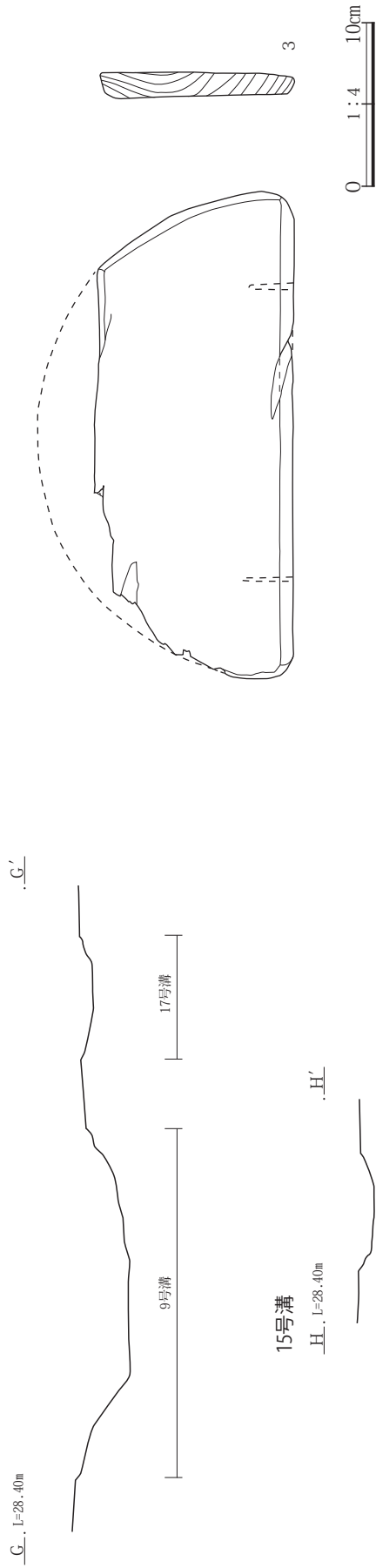


4・9・15号溝D-D'

- |   |                  |  |    |                |                                    |
|---|------------------|--|----|----------------|------------------------------------|
| 1 | 褐灰色土(10YR5/1)    | 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量。(4号溝覆土)                        | 7  | 褐灰色土(10YR5/1)  | 粘性やや強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガング粒少量。(15号溝)  |
| 2 | にぶい黄褐色土(10YR6/3) | 粘性やや強い。斑点状の鉄分沈着やや多い。(4号溝覆土)                    | 8  | 褐灰色土(10YR5/1)  | 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガング粒少量。(9号溝覆土)   |
| 3 | 褐灰色土(10YR5/1)    | 粘性やや強い。斑点状の鉄分沈着やや多い。(4号溝覆土)                    | 9  | 褐灰色土(10YR5/1)  | 粘性強い。斑点状の鉄分沈着やや多。(9号溝覆土)           |
| 4 | 褐灰色土(10YR4/1)    | 粘性強い。斑点状の鉄分沈着やや多、マンガング粒やや多。(4号溝覆土)             | 10 | 黒褐色土(10YR3/2)  | 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量。(9号溝覆土)            |
| 5 | 褐灰色土(10YR5/1)    | 粘性強い。V層ブロックを少量含み、斑点状の鉄分沈着やや多、マンガング粒やや多。(4号溝覆土) | 11 | 灰黄褐色土(10YR5/2) | 粘性強い。斑点状の鉄分沈着やや多、マンガング粒少量。(9号溝覆土)  |
| 6 | 褐灰色土(10YR4/1)    | V層ブロックをやや多く含み、斑点状の鉄分沈着やや多、マンガング粒やや多。(4号溝覆土)    | 12 | 褐灰色土(10YR5/1)  | 粘性強い。斑点状の鉄分沈着やや多、マンガング粒やや多。(9号溝覆土) |

9・17号溝

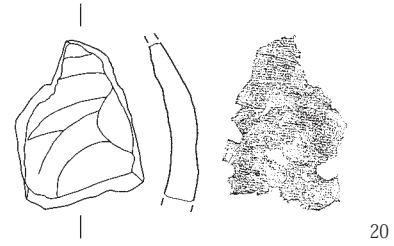
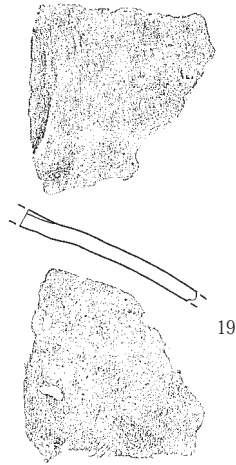
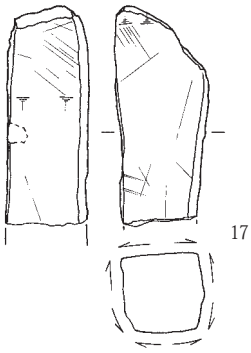
G, L=28.40m



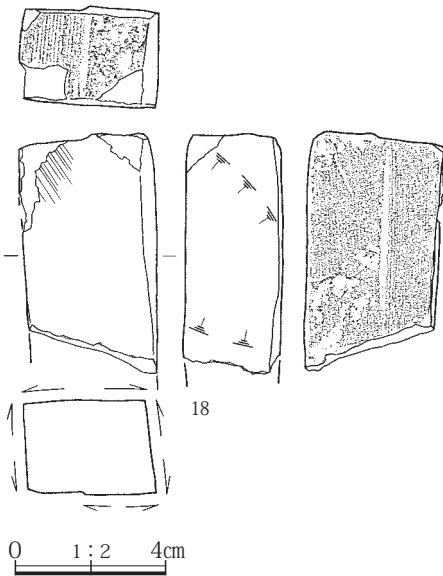
0 1:40 1m

第12図 4・9・15～17号溝土層断面(2)、4号溝出土遺物

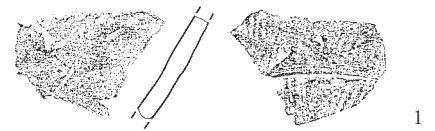
4号溝



0 1:3 10cm



16号溝



0 1:3 10cm

第13図 4・16号溝出土遺物

Y=-40517.091地点の東壁に取り付いて出土した渥美陶器壺か甕の体部片である。出土標高は28.058m。内面撫で。外面に自然釉。12～13世紀か。

3は埋土中から出土した器形不詳の瀬戸・美濃陶器口縁部1/5片である。口縁部は小さく内湾。体部外面回転篋削り。内外面に飴釉、口縁端部に灰釉。灯火具か。江戸時代。

なお、その他、非掲載であるが、近世国産施釉陶器片5点、近世在地系焙烙・鍋片1点、時期・器形不詳の小破片1点が出土している。

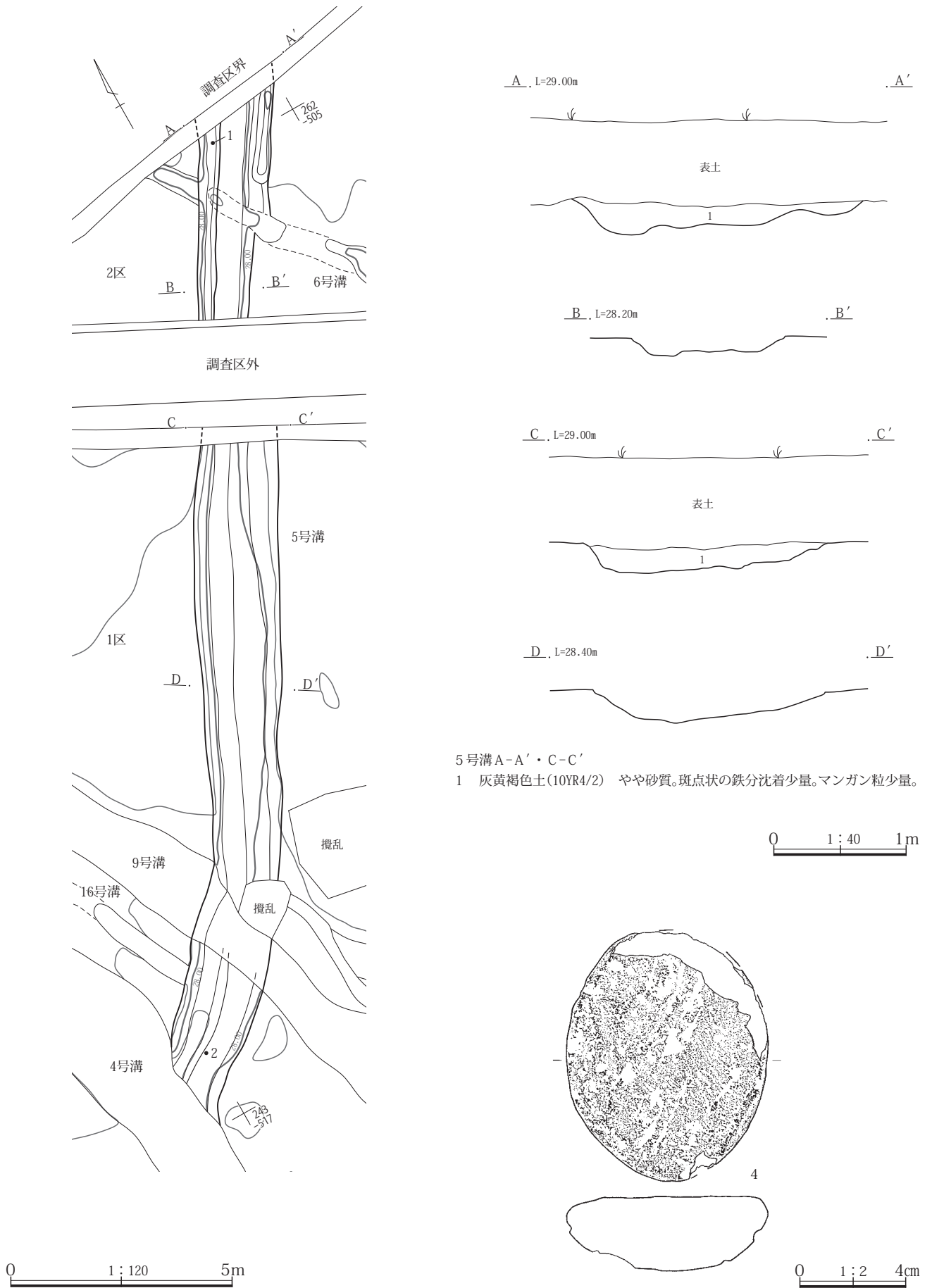
(2)石製品

埋土中より完形の二ツ岳軽石製の石製品が1点出土した(4)。長さ9.4cm・幅7.6cm・厚さ3.0cm・重さ107.2g。上端側中央には斜向する整形痕が残されている他は丁寧に研磨されて平坦面が形成されている。太田市新田上根遺跡、高崎市原北遺跡、伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡等利

根川流域の遺跡からも同様の石製品の出土例がある。

**所見** 1区の東寄りの部分から2区の北西端にかけて北東-南西方向に走行する。北東端は2区調査区北壁外に延び、南西端は4号溝4号溝と合流している。また、北東端付近で6号溝とも交差しているが、検出面において明らかに6号溝を掘り込んでいることが確認出来るので、6号溝が古く5号溝が新しい。また、南西端付近で9号溝と交差しているが、やはり検出面におけるプラン確認によって9号溝より新しいことが判明している。

2区北壁寄りでは一部が広くなり、溝の西側が筋状にやや深くなる箇所が認められるが、5・6号溝SPAのⅢC層の落ち込みを含んでいるためであり、その部分は別の溝であった可能性を有する。上流側では7号溝のように何筋かに分けられた可能性もある。ただし、覆土では分別できず、一括して5溝とした。この傾向は1区から検出された溝の中・下流側においても確認することが出



第14図 5号溝、出土遺物

来、全体的に西側が深く東側が浅い傾向にある。2条が重複していた可能性もあるが詳細は不明である。

確認面の標高は28.05～19m、底面の標高は27.91～97m前後である。周辺の地形は全体的に平坦で、溝の底面レベルはほぼ水平であるが、4号溝との合流点付近はやや深くなり、北東から南西に流れたものと考えられる。

時期 中近世のものと考えられる。

## 6. 6号溝(第15・16図、PL. 5)

位置 1区の南東寄りから2区の北西端にかけて。X=27242～262、Y=-40496～508。

重複 2区で検出された溝北西端で5号溝に掘り込まれる。1・2区の境界付近で7・11・12号溝と重複しているが、2区南壁の土層断面から7・12号溝を掘り込んでいることは確認することが出来たが、11号溝との新旧関係は不明である。1区で検出された溝南東端で13号溝に掘り込まれる。

主軸方位 N-29°-38°-E。

規模 検出全長23.24m、上幅0.45～1.43m、下幅0.12～0.87m、深さ0.13～0.56m。

埋土 上層に粘性強く、斑点状の鉄分沈着がやや多く、マンガン粒を少量含む褐灰色土(10YR4/1)が堆積し、下層に黒褐色土(10YR3/1)が堆積する。

遺物 なし。

所見 1区の北西寄りの部分から2区の南東端にかけて北西-南東方向に走行する。北東端は2区調査区北壁外に延び、南西端は1区南壁外へと延びている。1区側では13号溝と平行し、1区南壁際で13号溝に掘り込まれる。

確認面の標高は28.07～16m前後、底面の標高は27.62～28.05m前後である。途中で細くなり、途切れてしまう部分がある。底面レベルがやや不揃いであるが、周辺の地形は全体的に平坦で、溝底は全体的には南西側が低い。北西から南東に流れたものと考えられる。

時期 中近世のものと考えられる。

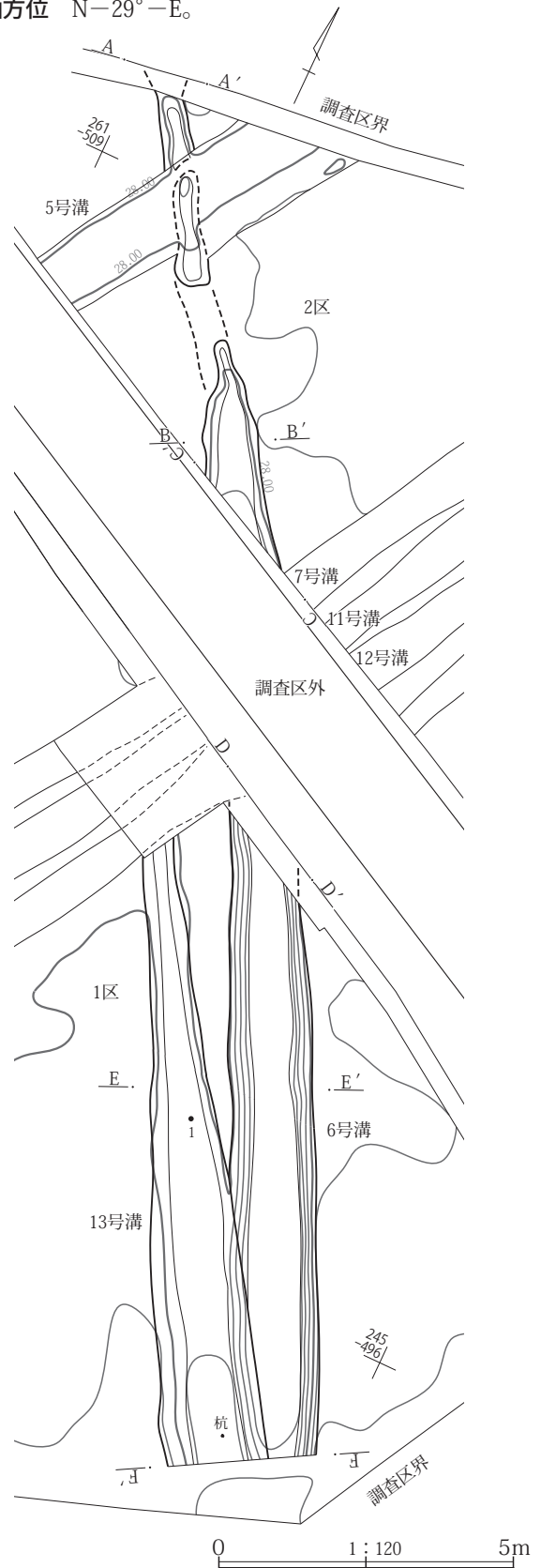
## 7. 7号溝(第17・18図、PL. 6・7・11)

位置 1区の南東寄りから2区の中央にかけて。8・11・12号溝の西側に並行して近接する。X=27241～264、Y=-40498～512。

重複 2区南端で6号溝を掘り込む。また、1区側の溝

南西端で南西側からの17号溝を掘り込む。南西端は9号溝を破壊した痕跡は無いため、9号溝に合流していたものと見られる。

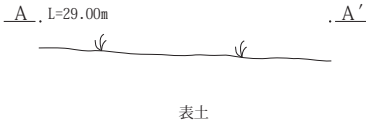
主軸方位 N-29°-E。



第15図 6・13号溝

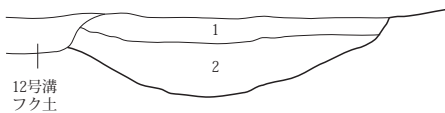
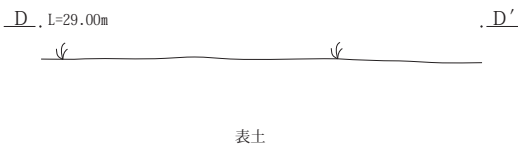
第3章 発見された遺構と遺物

6号溝

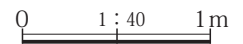
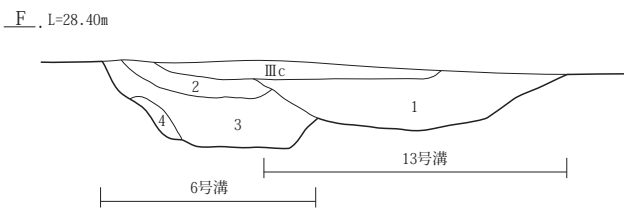
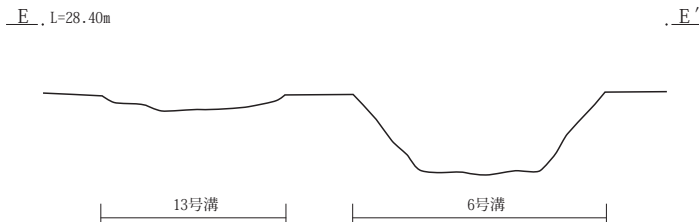


6号溝 A-A'

1 黒褐色土(10YR2/2) やや砂質。V層ブロックを少量含む。



6・13号溝

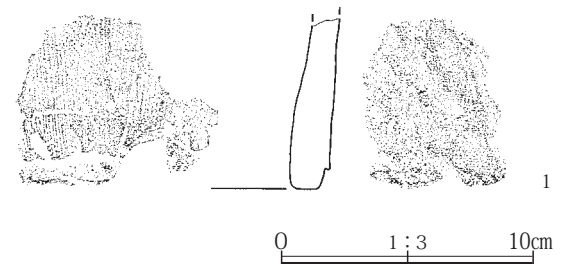


6号溝 F-F'

IIIc 灰黄褐色土(10YR4/2) 径1mm程度の白色軽石を少量。斑点状の鉄分沈着少量。

- 1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガング粒少量。(13号覆土)
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着やや多、マンガング粒少量。(6号溝覆土)
- 3 黒褐色土(10YR3/1) 粘性やや強い。斑点状の鉄分沈着やや多、マンガング粒少量。(6号溝覆土)
- 4 黒褐色土(10YR3/1) 1区基本土層1のV層ブロックをやや多く含む。(6号溝覆土)

13号溝



第16図 6・13号溝土層断面、13号溝出土遺物

**規模** 検出全長27.58m、上幅0.56~1.40m、下幅0.18~0.66m、深さ0.24~0.35m。

**埋土** 上層に粘性強く、1区基本土層V層ブロックをやや多く、斑点状の鉄分沈着及びマンガン粒を少量含む褐灰色土(10YR5/1)が堆積し、下層に粘性強く、斑点状の鉄分の沈着及びマンガン粒を少量含む褐灰色土(10YR5/1)が堆積する。

#### 遺物

##### (1)中近世陶磁器・土器類

埋土中から1点が出土した(1)。1は在地系土器片口の1/8片で、灰白色で内面から口縁部外面器表黒色。口縁部は歪み、残存部端は片口部。口縁部付近小さく屈曲して立ち上がる。体部内面下位は使用により器表摩滅。14世紀。

##### (2)石製品

埋土中より完形の二ツ岳軽石製の石製品が1点出た(2)。長さ15.2cm・幅14.7cm・厚さ11.4cm・重さ1673.1g。背面側中央に幅1.5cm程度の弱い整形痕があるほか、下端側にはやや深い整形痕(幅2.2cm)が残る。整形痕は不規則で、意図的になされたものとは見出し難い。太田市新田上根遺跡、高崎市原北遺跡、伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡等利根川流域の遺跡から同様の石製品の出土例がある。

**所見** 2区の中央から1区東寄りの部分にかけて8・11・12号溝と近接・並行して北東-南西方向に走行する細い溝。北東端は2区調査区北壁外に延び、南西端は1区で検出された北西-南東方向の9号溝に合流する。

2区北壁側では、7号溝と11号溝の埋土は分層出来なかった。底面中央がやや盛り上がるため、その西側が7号溝、東側が11号溝に相当する。検出時には恰も1本の溝であるかのように見えたが、掘削したところ2本の溝となり、西側を7号溝、東側を11号溝とした。

2区南壁側では、7号溝と11号溝は明確に分かれ、同時に機能していた可能性と、11号溝が古く7号溝が新しい可能性の両者があるが、判断することは出来なかった。

確認面の標高は27.81~92m前後、底面の標高は27.74~86m前後である。周辺の地形も、7・11・12号溝の底面レベルもともに北高南低である。北東から南西方向へと流れ、9号溝に合流したものと考えられる。

**時期** 中近世のものと考えられる。

#### 8. 8号溝(第17・18図、PL. 6・11)

**位置** 2区の中央。7・11・12号溝の西側に並行して近接する。X=27254~262、Y=-40496~500。

**重複** なし。

**主軸方位** N-29°-E。

**規模** 検出全長8.50m、上幅0.41~0.52m、下幅0.12~0.24m、深さ0.04~0.11m。

**埋土** 粘性強く、斑点状の鉄分沈着及びマンガン粒を少量含む褐灰色土(10YR5/1)が堆積する。

**遺物** 検出範囲の南寄りのX=27256.730・Y=-4051.890地点、底面より7.7cm上から渥美陶器の壺か甕の体部片が1点出た(1)。内外面撫で調整で、12世紀頃のものと考えられる。出土標高は27.987mである。

なお、非掲載であるが、他に、中近世陶磁器・土器類で時期・器形不詳の小破片1点が出土している。

**所見** 2区の中央を7・11・12号溝と近接・並行して北東-南西方向に走行する細い溝。北東端は2区調査区中央北寄りのX=27262・Y=-40491.3付近で止まり、南西端は2区南壁までは検出されたが、その南西側、北西-南東方向に走行する生活道路を挟んだ1区側からは全く検出されなかった。2区北壁までは延びていなかったか、延びていたとしても浅く、後世の耕作等によって掘削され、消失したものと考えられる。

確認面の標高は28.08~15m前後、底面の標高は28.05m前後と、周辺の地形、溝底面レベルもともにほぼ平坦である。

**時期** 中近世のものと考えられる。

#### 9. 9号溝(第10~12図、PL. 7・11)

**位置** 1区の東寄り。4・15・16号溝の東側に並行して近接する。X=27236~258、Y=-40510~523。

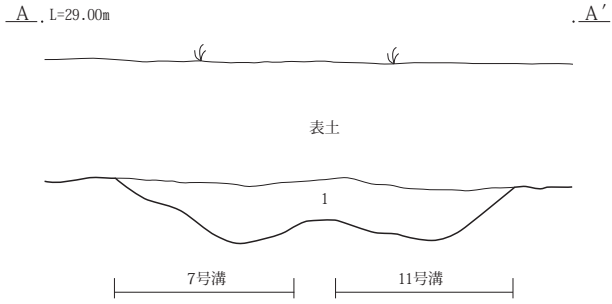
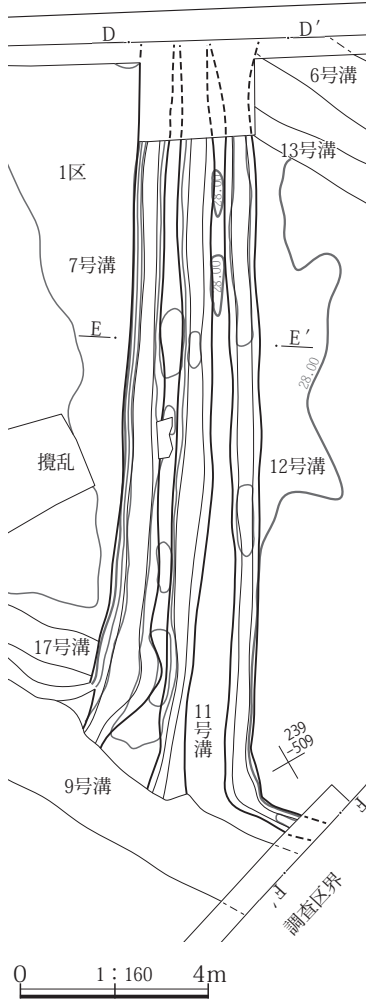
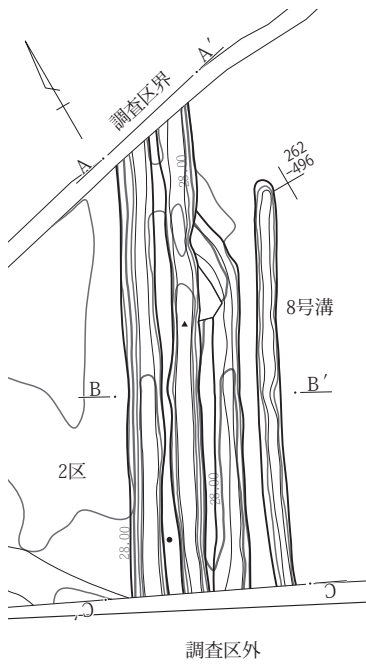
**重複** 中央からやや南寄りの位置で5号溝に掘り込まれ、南寄りの位置で17号溝の北西端を掘り込む。南東端付近で7・11号溝が合流している。

**主軸方位** N-13~43°-W。

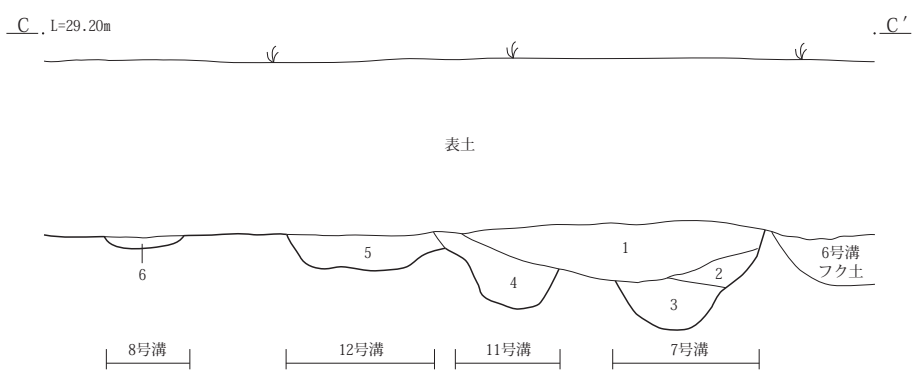
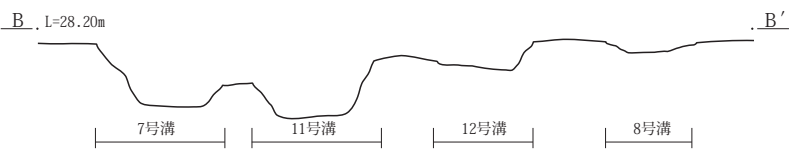
**規模** 検出全長24.50m、上幅0.99~2.12m、下幅0.33~1.20m、深さ0.19~0.60m。

**埋土** 上層に粘性強い褐灰色土(10YR5/1)、中層に粘性が強い灰黄褐色土(10YR5/2)が、下層に褐灰色土

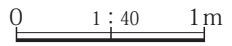




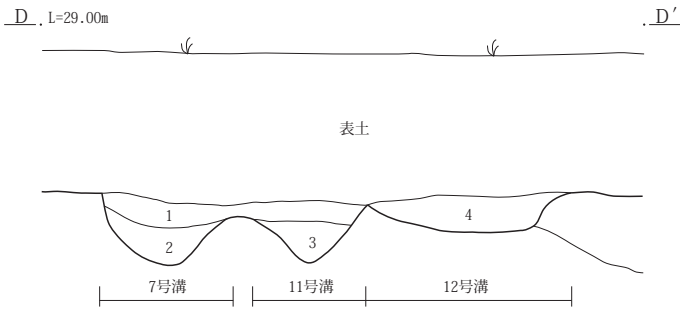
7・11号溝 A-A'  
 1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着、マンガン粒やや多量。



7・8・11・12号溝 C-C'  
 1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガン粒少量。(7・11号溝覆土)  
 2 褐灰色土(10YR6/1) 粘性強い。V層ブロックをやや多く含む。斑点状の鉄分沈着少量、マンガン粒少量。(7号溝覆土)  
 3 褐灰色土(10YR6/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガン粒少量。(7号溝覆土)  
 4 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着やや多量、マンガン粒少量。(11号溝覆土)  
 5 褐灰色土(10YR5/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガン粒やや多量。(12号溝覆土)  
 6 褐灰色土(10YR5/1) 粘性やや強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガン粒少量。(8号溝覆土)

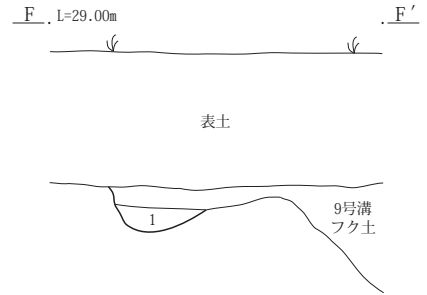
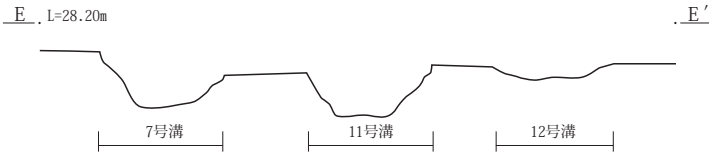


第17図 7・8・11・12号溝



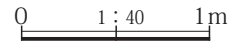
7・8・11号溝D-D'

- 1 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガング粒少量。(7・11号溝覆土)
- 2 褐灰色土(10YR6/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガング粒少量。(7号溝覆土)
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着やや多量、マンガング粒少量。11号溝覆土)
- 4 褐灰色土(10YR5/1) 粘性強い。斑点状の鉄分沈着少量、マンガング粒やや多量。(12号溝覆土)

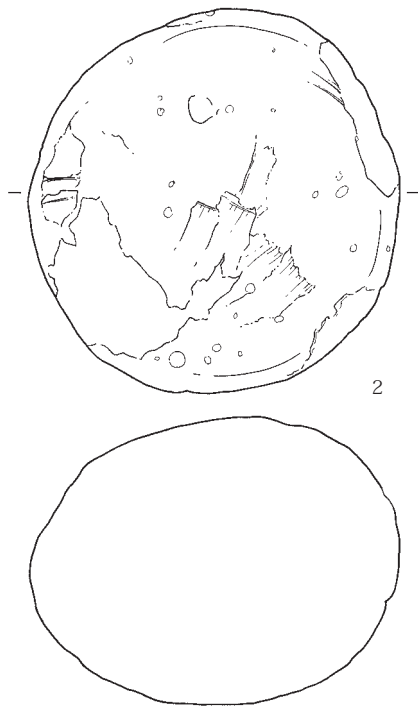


12号溝 F-F'

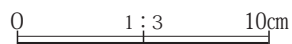
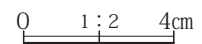
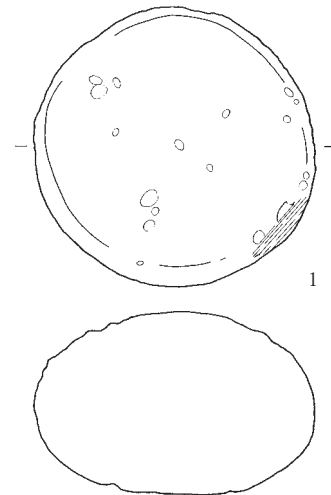
- 1 褐灰色土(10YR5/1) 1区基本土層1のV層ブロックをやや多く含む。



7号溝



11号溝



第18図 7・8・11・12号溝土層断面、7・11号溝出土遺物

(10YR5/1)が堆積する。

**遺物** 溝中央付近、X=27249.289・Y=-40515.609地点の西壁に取り付いて在地系内耳鍋口縁部片が1点出土した(1)。出土標高は28.106m。断面中央暗灰色、断面灰白色、器表黒色。口縁部は厚く短い。内耳は太く、粘土紐を器壁に貫通させていると考えられる。14世紀後半～15世紀中葉頃のものと思われる。

この他に、非掲載であるが、古代の土師器小型製品片が1点出土している。

**所見** 1区の東寄りの位置を4・15・16号溝等と近接・並行して北西-南東方向に蛇行ながら走行する溝。北西端は2区調査区北壁外へと延び、南西端は2区南壁外へと延びている。

2区北壁断面では1区基本土層IV層直下に掘り込みがみられる。埋土は1区基本土層IV層と類似するが、その境には弱い鉄分の凝集層が認められ、鋤床層が形成され始めていたものと考えられる。溝が機能しなくなってから1区基本土層IV層を水田耕作土として水田耕作が行われていた可能性が考えられる。

確認面の標高は28.03～15m前後、底面の標高は27.45～87m前後と、周辺の地形、溝底面レベルもともに北西側が高く、南東側が低くなっており、北西側から南東側へと流れていたものと考えられる。

**時期** 中近世のものと考えられる。

#### 10. 11号溝(第17・18図、PL. 6・7・11)

**位置** 2区の中央から1区の東側にかけて、7号溝の東側、8・12号溝の西側に並行して近接する。X=27254～262、Y=-40496～500。

**重複** 12号溝は、本溝北端寄りの位置から分岐するような状態であるが、掘削深度が浅い。南西端は9号溝に合流している。先述した通り、6号溝との新旧関係は不明である。

**主軸方位** N-29°-E。

**規模** 検出全長29.40m、上幅0.49～0.80m、下幅0.17～0.48m、深さ0.17～0.27m。

**埋土** 粘性強く、斑点状の鉄分沈着がやや多く、マンガンを少量含む褐灰色土(10YR4/1)が堆積する。

**遺物** 埋土中より完形の二ツ岳軽石製の石製品が1点出土した(1)。長さ7.4cm・幅7.4cm・厚さ4.8cm・重さ

137.1g。背面側は劣化して礫面が荒れ、側縁に摩耗面が残るのに対して、裏面側の摩耗は比較的明瞭である。太田市新田上根遺跡、高崎市原北遺跡、伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡等利根川流域の遺跡からも同様の石製品の出土例がある。

この他、非掲載であるが埋土中から古代の土師器大型製品片が1点出土している。

**所見** 2区の中央から1区東寄りの部分にかけて7・8・12号溝と近接・並行して北東-南西方向に走行する細い溝。北東端は2区調査区北壁外に延び、南西端は1区で検出された北西-南東方向の9号溝に合流する。

確認面の標高は27.75～28.11m前後、底面の標高は27.75m前後と、底面レベルはほぼ水平だが、7号溝まで含めると、南側が低く、北から南に流れ、9号溝に合流したものと考えられる。

**時期** 中近世のものと考えられる。

#### 11. 12号溝(第17・18図、PL. 6)

**位置** 2区の中央から1区の東側にかけて、7・11号溝の東側、8号溝の西側に並行して近接する。X=27237～262、Y=-40498～508。

**重複** 11号溝北端寄りの位置から分岐するような状態である。南西端は9号溝に合流している。1区北で13号溝と交差するが、新旧関係は確認できなかった。中央部で6号溝を掘り込む。

**主軸方位** N-29°-E、N-10°-38°-W。

**規模** 検出全長28.15m、上幅0.37～0.76m、下幅0.01～0.38m、深さ0.07～0.20m。

**埋土** 粘性強く、斑点状の鉄分沈着が少量、マンガンを多量に含む褐灰色土(10YR5/1)が堆積する。

**遺物** なし。

**所見** 2区の中央から1区東寄りの部分にかけて7・8・12号溝と近接・並行して北東-南西方向に走行する細い溝。北東端は2区調査区北壁の手前付近で11号溝から分岐する。南西端は1区南壁付近で90度近く向きを変えて東側に屈曲し、9号溝と並行して1区南壁外へと延びている。

確認面の標高は27.75～28.11m前後、底面の標高は27.75m前後と、確認面も底面もほぼ水平である。

本溝は11号溝から分岐するが、掘削深度が浅く、2区

南壁側における土層断面の観察からは、本溝が古く11号溝が新しいことが判明する。本溝は、水路用の溝というよりは、畦を盛るために掘削した溝と想定出来る。

**時期** 中近世のものと考えられる。

## 12. 13号溝(第15・16図、PL. 5)

**位置** 1区の南東端付近。X=27241~251、Y=-40496~503。

**重複** 1区北で12号溝と交差するが、新旧関係は確認できなかった。1区南東端で6号溝を掘り込む。

**主軸方位** N-32°-W。

**規模** 検出全長10.44m、上幅0.52~1.73m、下幅0.21~0.86m、深さ0.02~0.31m。

**埋土** 粘性強く、斑点状の鉄分沈着及びマンガン粒を少量含む褐灰色土(10YR4/1)が堆積する。

**遺物** 検出範囲のほぼ中央の底面から0.93cm上の位置から埴輪基部片1点が出土した(1)。残存部下位に凸帯?の剥離痕があり、外面は刷毛目。内面は篋撫で調整。

**所見** 1区の南東端付近を北西から南東方向に走行する。本溝が掘り込む6号溝とほぼ類似した走行であるが、主軸方位は若干異なる。2区では、連続する溝は確認できなかった。11・12号溝と交差するが、排水用の釜場を掘ってしまったため、先後関係を確認できなかった。6・11・12・13号溝SPAでも本溝に対応する埋土は確認出来なかった。検出範囲の南端付近、1区南壁際で杭1を検出した。直立してはいるが、溝の底面にまで打ち込まれておらず、埋土中に含まれていたものと考えられる。下端部が加工されている(非掲載)。

確認面の標高は28.00~16m前後で南東側に向かって僅かに高くなっている一方、底面の標高は27.85~97m前後で、底面レベルでは南東側が低くなっている。

**時期** 中近世のものと考えられる。

## 13. 15号溝(第10~12図、PL. 8)

**位置** 1区の東寄りの位置、南端。4号溝の東、9号溝の西側に位置している。X=27236~241、Y=-40513~516。

**重複** なし。

**主軸方位** N-22°-W。

**規模** 検出全長5.52m、上幅0.44~0.80m、下幅0.22~0.41m、深さ0.04~0.20m。

**埋土** 粘性やや強く、斑点状の鉄分沈着及びマンガン粒を少量含む褐灰色土(10YR5/1)が堆積する。

**遺物** なし。

**所見** 1区の東寄りの位置を4・9号溝に挟まれて北西-南東方向に走行する。南東端は1区南壁外へと延び、北西端はX=27241.5・Y=-40515.9付近で止まっている。

形状は10号溝を挟んで北側の16号溝と類似しており、一連の溝である可能性も存在するが、確たる根拠が得られなかったため、別遺構とした。掘削深度が浅く、水路用の溝というよりは、畦を盛るために掘削した溝と想定出来る。

確認面の標高は28.14~19m前後、底面の標高は28.01~11m前後で全体的にはほぼ平坦である。

**時期** 中近世のものと考えられる。

## 14. 16号溝(第10~13図、PL. 7)

**位置** 1区の東寄りの位置。4号溝の東、9号溝の西側に位置している。X=27236~241、Y=-40513~516。

**重複** 南東端を5号溝に掘り込まれる。

**主軸方位** N-25~38°-W。

**規模** 検出全長14.00m、上幅0.36~0.69m、下幅0.17~0.34m、深さ0.03~0.09m。

**埋土** 斑点状の鉄分沈着及びマンガン粒を少量含む灰黄褐色土(10YR4/2)が堆積する。

**遺物** 検出範囲のほぼ中央部の溝底より約6cm上の埋土中から8世紀前半代の須恵器甕胴部片が1点出土(1)。外面は平行叩き後篋撫でか、内面は当て具痕を篋撫で消している。埋土の状況等から溝の年代観を示す遺物とは考えにくく、後世の流れ込みと考えられる。

**所見** 1区の東寄りの位置を4・9号溝に挟まれて北西-南東方向にやや屈曲しつつ走行する。途中で浅くなり途切れているが、連続の溝と判断した。北東端は1区調査区北壁外へと延び、南西端は先述した通り5号溝に掘り込まれる。

形状は10号溝を挟んで南側の15号溝と類似しており、一連の溝である可能性も存在するが、確たる根拠が得られなかったため、別遺構とした。

4・9・16号溝SPAでは1区基本土層IV層直下に掘り込みがみられる。埋土は1区基本土層IV層と類似するが、

その境界には鉄分の凝集層がほとんど認められず、東隣の9号溝に鉄分の凝集層が存在するのと対照的である。このことから、16号溝は畦畔構築用の溝であり、鋤床層が形成されなかったと考えることも可能かもしれない。また、4・9・16号溝SPAでは、4号溝と16号溝の間に1区基本土層V層の高まりが認められる。これは、畦部にあたる掘り残しで、擬似畦畔の可能性もあると考えられる。

いずれにしても掘削深度が浅いため、15号溝と同様、水路用の溝というよりは、畦を盛るために掘削した溝と想定出来る。

確認面の標高は28.09～13m前後、底面の標高は28.01～14m前後で全体的にほぼ平坦である。

**時期** 中近世のものと考えられる。

#### 15. 17号溝(第10～12図、PL. 8)

**位置** 1区の南東寄りの位置。X=27242～245、Y=-40511～513。

**重複** 北西端を9号溝に、南東端を7号溝にそれぞれ掘り込まれる。

**主軸方位** N-39°-W。

**規模** 検出全長3.23m、上幅0.78m、下幅0.25～0.41m、深さ0.09m。

**埋土** 不明。

**遺物** 非掲載であるが、埋土中より中世在地系鉢・鍋片1点が出土している。

**所見** 1区の南東寄りの位置を北西-南東方向に走行する。先述した通り、北西端を9号溝に、南東端を7号溝に掘り込まれ、全長3.23m部分しか検出されなかった。他の溝と比較し浅く、底面は1区基本土層V層中である。確認面の標高は28.01～06m前後、底面の標高は27.98m前後で、全体的にほぼ平坦である。

**時期** 中近世のものと考えられる。

#### 16. 遺構外出土遺物(第19図、PL. 11)

遺構外から出土した遺物を以下にまとめて掲載する。細かな調整や特徴等については、後掲の第3表遺物観察表に明示してあるので、詳細については参照されたい。遺構外からの出土遺物で採り上げたものは、埴輪2点、土師器1点、須恵器3点、近世陶磁器・土器類1点、金

属器1点である。

##### (1) 埴輪

1区及び2区の遺構外から出土した古墳時代後期の埴輪片各1点、計2点を採り上げた(1・2)。

1は1区東寄りの南端付近、南壁際。8・15号溝の間のX=27236.848・Y=-40512.908地点のⅢ層中から出土。出土標高は28.130mで、遺構確認面のレベルよりも約1.5cm上からの出土である。鈍い橙色を呈する小片で、外面は刷毛目、内面は篋撫で調整。

2は2区表土からの出土で、浅黄橙色を呈する基部片である。外面は刷毛目、内面は篋撫で、底部は撫で調整。

なお、この2点以外に、非掲載であるが、2区遺構外表土中から埴輪片2点が出土した。

##### (2) 土師器

1点を採り上げた(3)。

3は1区の南西端付近、南壁際のX=27230.274・Y=-40572.183地点から出土した土師器杯2/3片。出土標高は28.276mで、遺構確認面よりも約6.4cm上からの出土である。橙色を呈し、口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち篋削り。8世紀前半代のものと考えられる。

なお、非掲載であるが、この他に1区遺構外表土から土師器大型製品片が1点、2区遺構外表土から土師器小型製品片2点がそれぞれ出土している。

##### (3) 須恵器

3点を採り上げた(4～6)。

4は1区の西寄り中央のX=27241.087・Y=-40557.442地点のV層中から出土した。出土標高は28.532mで確認面より約2.2cm上から出土した須恵器甕胴部上位片で、灰色を呈し、外面には平行叩き痕、内面には無文の当具痕が残る。外面に降灰が付着している。8世紀前半代のものか。

5は2区の中央、北寄りのX=27263.521・Y=-40495.681地点のⅢ層中からの出土。出土標高は28.113mで、確認面直上から出土した須恵器甕胴部片で、灰白色を呈し、内外面とも篋撫で調整が施されている。8世紀前半代頃のものと考えられる。

6は2区表土中から出土した須恵器甕底部片で、外面は篋削り調整か。内面は篋撫で調整が施されている。8世紀前半代頃のものと考えられる。

これらの他に非掲載であるが、2区遺構外から須恵器

大型製品片1点が出土している。

#### (4) 中近世陶磁器・土器類

1点を採り上げた(7)。

7は1区の北東寄り、9号溝の東岸のX=27255.556、Y=-40518.928地点。標高は28.277mで、遺構確認面より13.7cm上から出土した龍泉窯系青磁碗口縁部片である。灰色を呈し、鎬蓮弁文で、13世紀頃のものと考えられる。

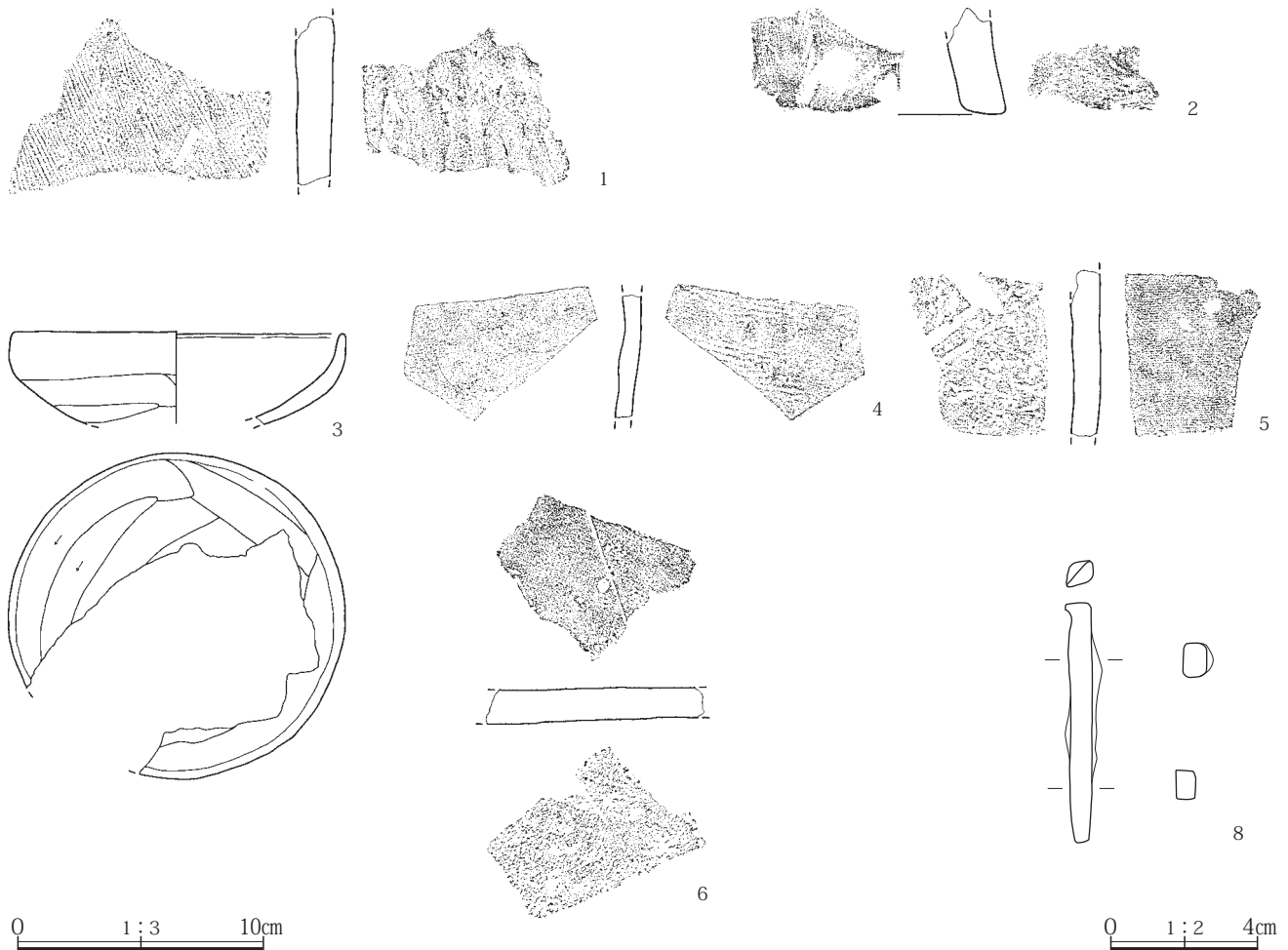
なお、この他に非掲載であるが、1区遺構外から近世国産磁器片3点と時期不明の土器類片3点が出土し、2区遺構外から中世国産焼締土器片1点と近世国産施釉陶器片2点及び時期不明土器類片2点が出土している。

#### (5) 金属器

1点が出土した(8)。

8は2区東寄り中央、X=27263.081・Y=-40489.366地点から出土した鉄製のほぼ完形の釘で、出土標高は

28.271mで、遺構確認面レベルより3.1cm上から出土した。長さ6.5cm、幅1.0cm、厚さ0.8cm、重さ10.4gで、頭部が僅かに折れ、脚部の端部は欠損している。年代は不詳である。



第19図 遺構外出土遺物

第2表 検出遺構数一覧表

遺構名	1号溝	2号溝	3号溝	4号溝	5号溝	6号溝	7号溝	8号溝	9号溝	11号溝	12号溝	13号溝	15号溝	16号溝	17号溝
検出区	1区	1区	1区	1区	1区東寄り～2区北西端	1区南東寄り～2区北西端	1区東寄り～2区中央	2区	1区	1区東側～2区中央	1区東側～2区中央	1区	1区	1区	1区
位置(座標)	X=27242～248 Y=40559～567	X=27238～253 Y=40522～548	X=27227～254 Y=40533～551	X=27234～258 Y=40516～527	X=27243～263 Y=40504～517	X=27242～262 Y=40496～508	X=27241～264 Y=40498～512	X=27254～262 Y=40496～500	X=27236～258 Y=40510～523	X=27239～264 Y=40496～511	X=27237～262 Y=40488～508	X=27241～251 Y=40496～503	X=27236～241 Y=40513～516	X=27246～758 Y=40516～523	X=27242～245 Y=40511～513
重複	なし。	3号溝を掘り込む。	2号溝に掘り込まれる。	5号溝を掘り込む。	4号溝に合流、6号溝を掘り込む。	5・7・12号溝を掘り込む。13号溝に掘り込まれる。11号溝との新旧関係は不明。	6・17号溝を掘り込む。9号溝に合流する。	なし。	5号溝に掘り込まれる。17号溝を掘り込む。7・11号溝に合流する。	12号溝が分岐、9号溝に合流、6号溝との新旧関係は不明。	6号溝を掘り込む。11号溝北端寄りから分岐、11号溝より古い。南西端は9号溝に合流。13号溝との新旧関係は不明。	6号溝を掘り込む。12号溝との新旧関係は不明。	なし。	5号溝に掘り込まれる。	7・9号溝に掘り込まれる。
主軸方位	N-53°-W	N-60°-W	N-33°-E	N-0°-37°-W	N-28°-E	N-29°-38°-W	N-29°-E	N-26°-E	N-13°-43°-W	N-29°-E	N-28°-E、 N-10°-38°-W	N-32°-W	N-22°-W	N-25°-38°-W	N-39°-W
検出全長	9.65m	30.29m	32.80m	21.80m	22.62m	23.24m	27.58m	8.50m	24.50m	29.04m	28.15m	10.44m	5.52m	14.00m	3.23m
上幅	0.57～0.76m	0.63～1.10m	0.21～0.53m	1.62～2.37m	1.21～1.88m	0.45～1.43m	0.58～1.40m	0.41～0.52m	0.99～2.12m	0.49～0.80m	0.37～0.76m	0.52～1.73m	0.44～0.80m	0.36～0.69m	0.78m
下幅	0.34～0.46m	0.32～0.59m	0.09～0.25m	0.31～1.45m	0.10～0.54m	0.12～0.87m	0.18～0.66m	0.12～0.24m	0.33～1.20m	0.17～0.27m	0.01～0.38m	0.21～0.86m	0.22～0.41m	0.17～0.34m	0.25～0.41m
深さ	0.10～0.19m	0.07～0.22m	0.04～0.20m	0.57～0.75m	0.15～0.31m	0.13～0.56m	0.24～0.35m	0.04～0.11m	0.19～0.60m	0.17～0.27m	0.07～0.20m	0.02～0.31m	0.04～0.20m	0.03～0.09m	0.09m
埋土	暗褐色土(10YR3/3)ベラス。	暗褐色土(10YR3/3)ベラス。	暗褐色土(10YR3/3)ベラス。	褐灰色土(10YR5/1)をベラスに褐灰色砂(10YR4/1)が混じる。	灰黄褐色土(10YR4/2)ベラス。	上層に褐灰色土(10YR4/1)、下層に黒褐色土(10YR3/1)が堆積。	褐灰色土(10YR5/1)ベラス。	褐灰色土(10YR5/1)ベラス。	褐灰色土ベラス、中間に灰黄褐色土(10YR5/2)が挟まれる。	褐灰色土(10YR4/1)ベラス。	褐灰色土(10YR5/1)ベラス。	褐灰色土(10YR4/1)ベラス。	褐灰色土(10YR5/1)ベラス。	灰黄褐色土(10YR4/2)ベラス。	不明。
出土遺物	なし。	なし。	なし。	溝底に打ち込まれた木杭12本、曲物底板片1点、中近世陶磁器・土器類13点、砥石片2点、古代の須恵器壺片2点など。	中近世陶磁器・土器類3点、二ツ岳軽石製品1点。	なし。	中近世陶磁器・土器類1点及び二ツ岳軽石製品1点。	中近世陶磁器・土器類1点。	中近世陶磁器・土器類1点。	二ツ岳軽石製品1点。	なし。	埴輪片1点。	なし。	古代の須恵器片1点。	なし。
備考	南東側から北西側へと緩やかに傾斜するが、水流の痕跡は明確ではない。	平坦であり、水流の痕跡も明確ではない。	底面レベルから西から東に流れた可能性が考えられるが、水流の痕跡は明確ではない。	北西側から途中曲し、南側に向かって流れたものと考えられる。	北東から南西方向へと流れ、9号溝に合流したものと見られる。	平坦であり、水流の痕跡も明確ではない。	北東から南西方向へと流れる。9号溝に合流したものと見られる。	平坦であり、水流の痕跡も明確ではない。	北西側から南東側へと流れていたものと思われる。	北から南へと流れ、9号溝に合流したものと見られる。	確認面・溝底ともほぼ水平。掘削深度が浅く、畔を盛るために掘削した溝と想定出来る。	確認面は北西側から南東側に向かって高くなるが、溝底レベルでは南東側が低くなっている。	確認面・溝底ともほぼ水平。掘削深度が浅く、畔を盛るために掘削した溝と想定出来る。	確認面・溝底ともほぼ水平。掘削深度が浅く、畔を盛るために掘削した溝と想定出来る。	確認面、溝底ともほぼ平坦である。
年代	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世	中近世

## 第4章 調査成果の整理とまとめ

先述した通り、本遺跡は利根川や石田川の合流点付近の、標高約30m前後の低地上にあり、遺跡地は今まで幾度となく洪水を受けたものと考えられる。遺構確認を行った洪水堆積層の中からは、8世紀前半代の土師器環などが出土したが、その時代の遺構は全く確認することが出来なかった。

調査区は、既存の道路や水路によって4箇所に分割されており、西側から1区～4区とした。

1区と2区から、洪水堆積物を掘り込んで形成された15条の溝を確認した。調査対象範囲内において、全長が検出されたものは1条もなく、いずれも両端が調査区外へと延びているか、あるいは後世に上面が削平され、端部などを検出することが出来なかったものばかりであった。

1区から1～7・9・11～13、15～17号溝の14条が、2区から5～8・11・12号溝の6条が検出されたが、2区において検出された溝のうち、8号溝を除き、いずれも1区から検出された溝の北側に続く部分であり、すなわち、5～7・11・12号溝は1～2区にまたがって検出されている。

1区は、中央やや東から検出された4号溝を境として、東側において遺構検出面のレベルが低くなっており、遺構の密集度も高くなっている。この4号溝は、北西から南東へ流れる他の溝と比較して規模が大きく、この遺跡内から検出された諸溝のグループの中では主体的な水路として整備されたものである可能性が高いと考えられる。この4号溝からは、陶磁器類を中心に瓦や木製品などが出土しており、出土遺物の年代観から見れば、近世のものと考えられる。また、溝の中央付近から南西側縁辺にかけて木杭列が検出された。長さは約1m以上あり、地中深く打ち込まれていたため、土留めなどの目的で設置したものと想定出来る。

4号溝以外の溝については、遺物の出土が殆どないため、遺構の年代を特定することは難しいが、出土遺物や溝の埋土の様相から、ほぼ中・近世のものと考えられる。ただし、互いに重複する溝もあり、数時期にわたっ

て掘削されたものと考えられる。

なお、3・4区からは遺構は全く検出されなかった。

このように、検出範囲内で最も大きな溝が水路であると考えられることや、12・16号溝の様に掘削深度が浅く、水路用の溝というよりは、畦を盛るために掘削した溝と想定されるものも存在することから、本来、この地には水田が形成され、耕作が行われていたものと推測することが出来る。ただし、畦畔様の高まり等や、水路であった溝からの取水、排水施設の痕跡は勿論、水田区画の痕跡や、耕土である黒色土の層などを全く確認することは出来なかった。

本遺跡周辺にはいくつもの「条里水田」と称する埋蔵文化財包蔵地が点在していることから、周辺一帯には水田が広がり、微高地上に集落が営まれる景観の中で、当遺跡の地は、それらの面よりもさらに一段下がった、河川敷における小規模水田が営まれた場所という状況にあったものと想定することが出来るのではないだろうか。



遺物観察表

第3表 遺物観察表

4号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長径	短径	口径	高さ			
PL.9	1	木製品 杭	南側西岸 完形	119 4.8	-	-	-		節が多く見られる。杭の端部は切り落とされている。	近世か
PL.9	2	木製品 杭	南側西岸 完形	121 5.0	-	-	-		やや曲がっており、端部は切り落とされている。上部になっていた部分はやや劣化が見られる。	近世か
第12図 PL.9	3	木製品 底板	溝北端付近 X=2725.817・Y=- 40524.999地点。 標高27.764m、溝 底から10.4cm上。 2/3	径幅 29.7 12.0	厚 1.50	-	-		針葉樹。板目。一部欠損しており、木釘が2カ所にX線 写真撮影でわずかに確認できる。	近世か
PL.9	4	在地系土器 皿	溝北西部 X=27255.361・Y=- 40522.834地点。 標高28.036m、東 壁に取り付く。 口縁部1/5、底部 2/3	口径 (8.7) 6.2	高 1.7	-	-	/良好/橙	底部左回転糸切無調整。底部内面左回転の螺旋状轆轤目 顕著。底部に焼成後の小孔3カ所残る。	江戸時代。3 片接合。
PL.9	5	瓦 十能瓦	溝北西部 X=27255.361・Y=- 40523.149地点。 標高28.001m、底 面より28.1cm上。 角部片	縦 横 -	厚 1.4	-	-	/良好/灰白	断面中央黒色、断面灰白色、器表黒色。凸面は縮緬状痕、 凹面は丁寧な撫で調整で、端部に沿って強い撫で。	江戸時代～昭 和
PL.9	6	瀬戸・美濃 陶器 碗か	溝北西部 X=27256.330・Y=- 40518.658地点。 標高27.870m、東 壁に取り付く。 底部片	口径 4.4	高 -	-	-	/良好/灰	高台端部を除き、内面から高台内まで鉄化粧風に薄い飴 釉。底部内面周縁と高台脇の一部に釉溜り。	江戸時代。
PL.9	7	瀬戸・美濃 陶器 德利	溝中央部 X=27245.525・Y=- 40518.658地点。 標高28.008m、底 面から28.8cm上。 下半1/2	口径 (14.0)	高 -	-	-	/良好/灰白	外面は錆釉で体部外面下位以下を拭う。外面の体部下 端から底部外面は回転篋削り。	江戸時代。
PL.9	8	在地系土器 内耳鍋	溝中央部から南寄り X=27244.141・Y=- 40517.879地点。 標高28.186m、東 壁に取り付く。 口縁部片	口径 -	高 -	-	-	/良好/鈍い橙	器壁やや厚く、口縁部はやや伸長する。焼き上がり時に 酸化炎。	14世紀後半～ 15世紀中葉。
PL.9	9	肥前磁器 染付皿	X=27243.889・Y=- 40518.247、標高 28.141m、底面よ り48.1cm上。 口縁部一部、底 部1/6	口径 (19.4) (12.0)	高 3.9	-	-	/良好/灰白	口縁部から体部内面は花唐草文、外面は唐草文。底部内 面周縁は2重圏線、高台内は1重圏線。	17世紀末～ 18世紀中葉。
PL.10	10	在地系土器 片口鉢	X=27243.219・Y=- 40518.266、標高 28.185m、底面よ り52.5cm上。 口縁部片	口径 -	高 -	-	-	/良好/灰	口縁の玉縁部のみ横撫で。体部内面は顕著な撫で。体部 外面は指圧痕の凹凸残る。	14世紀中葉。
PL.10	11	在地系土器 焙烙	X=27242.545・Y=- 40518.786、標高 28.150m、西壁に 取り付く。 口縁部から体部片	口径 -	高 5.1	-	-	/良好/鈍い橙	断面にはにぶい橙色、器表は暗灰色。外面中位に紐作り痕。 外面下位は縮緬状痕と凹凸残る。	江戸時代。2 片接合。
PL.10	12	瀬戸・美濃 陶器 德利	X=27245.637・Y=- 40517.859、標高 27.961m、東壁に 取り付く。 底部片	口径 7.2	高 -	-	-	/良好/灰白	内面は無釉。外面は飴釉施釉後に体部下位いかの釉を拭 う。釉は白濁する。	江戸時代。
PL.10	13	肥前磁器 青磁皿か	埋土 底部1/5	口径 (4.0)	高 -	-	-	/良好/白	内面は片彫りと線彫りによる施文後、高台端部を除き青 磁釉。高台端部外面は面取り。	17世紀。
PL.10	14	肥前磁器 染付筒形碗	埋土 口縁部から体部 1/4	口径 -	高 -	-	-	/良好/白	外面に雪持ち竹。口縁部内面は2重圏線、底部内面周縁 は1重圏線。	18世紀中葉～ 19世紀初頭。
PL.10	15	肥前磁器 染付碗	埋土 口縁部一部、底 部完	口径 (9.6) 3.7	高 4.9	-	-	/良好/灰白	釉はやや濁り、染付が不鮮明。外面に雪輪梅樹文か。	18世紀中葉か ら後葉。2片 接合。
PL.10	16	渥美陶器 壺か甕	埋土 体部片	口径 -	高 -	-	-	/良好/灰白	内外面撫で。	12世紀。
第13図 PL.10	17	石製品 砥石	溝南部東壁際埋土。 X=27240.227・Y=- 40518.166、標高 28.131m。溝底よ り50.1cm上	長幅 (5.8) 2.5	厚重 2.2 46.9	-	-	砥沢石//	小形の切り砥石。背面側が研ぎ減っているが、残る砥面 の形状は良好で、比較的丁寧に管理されていたものと見 られる。	年代不明

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	(6.3) 3.6	厚 重			
第13図 PL.10	18	石製品 砥石	埋土 破片				砥沢石//	背面側は平坦な底面となっているが、右側底面は研ぎ減っている。上端小口部や裏面側には切断痕が残り、段差が生じている。左側は使用され部分的に研磨痕が残されているが、同種切断痕は見られない。	年代不明
第13図	19	須恵器 壺	埋土 胴部上位片				細砂粒/還元焰/灰	胴部は内外面とも篋撫で、残存部上位に口縁部との接合痕が残る。	8世紀前半代
第13図	20	須恵器 壺	埋土 底部小片				細砂粒/還元焰/灰	外面は篋撫で、内面は撫で。	8世紀前半代

5号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	(15.0)	高				
PL.10	1	堺・明石陶 器 播鉢	溝北。 X=27262.205・Y=- 40506.946、標高 27.956m。 体部片				/良好/赤	体部外面回転篋削り。内面は使用により器表平滑。	18世紀～19 世紀中葉。	
PL.10	2	渥美陶器か 壺か甕	溝南端部、4号溝 との合流点付近 の東壁に取り付 く。X=27244.576・ Y=-40517.091、 標高28.058m。 体部片				/良好/灰白	内面撫で。外面に自然釉。	12世紀～13 世紀か。	
PL.10	3	瀬戸・美濃 陶器 不詳	埋土 口縁部1/5				/良好/灰白	口縁部は小さく内湾。体部外面回転篋削り。内外面に餡釉、口縁端部に灰釉。灯火具か。	江戸時代。	
第14図 PL.10	4	石製品 石製品	南側西岸 完形	長 幅	9.4 7.6	厚 重	3.0 107.2	二ッ岳軽石//	上端側中央には斜向する整形痕が残されているほかは、丁寧に研磨されて平坦面が形成されている。新田町上根、高崎市原北、伊勢崎市阿弥大寺本郷等、利根川流域の遺跡からの出土例あり。	年代不明

7号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底		高				
PL.11	1	在地系土器 片口鉢	埋土 1/8片				/良好/灰白	灰白色で内面から口縁部外面器表黒色。口縁部は歪み、残存部端は片口部。口縁端部付近小さく屈曲して立ち上がる。体部内面下位は使用により器表摩滅。	14世紀。	
第18図 PL.11	2	石製品 石製品	埋土 完形	長 幅	15.2 14.7	厚 重	11.4 1673.1	二ッ岳軽石//	背面側中央に幅1.5cm程度の弱い整形痕があるほか、下端側にはやや深い整形痕(幅2.2cm)が残る。整形痕は不規則で、意図的にはみえない。新田町上根、高崎市原北、伊勢崎市阿弥大寺本郷等、利根川流域の遺跡からの出土例あり。	年代不明

8号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底		高			
PL.11	1	渥美陶器 壺か甕	南端付近 X=27256.730・Y=- 4051.890地点。 標高27.987m、底 面より7.7cm上。 体部片				/良好/灰白	内外面撫で。	12世紀。

9号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底		高			
PL.11	1	在地系土器 内耳鍋	溝中央付近 X=27249.289・Y=- 40515.609地点。 標高28.106m、西 壁に取り付く。 口縁部片				/良好/灰白	断面中央暗灰色、断面灰白色、器表黒色。口縁部は厚く短い。内耳は太く、粘土紐を器壁に貫通させていると考えられる。	14世紀後半～ 15世紀中葉。

11号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	7.4 7.4	厚 重			
第18図 PL.11	1	石製品 石製品	埋土 完形				二ッ岳軽石//	背面側は劣化して礫面が荒れ、側縁に摩耗面が残る。これに対して裏面側の摩耗は比較的明瞭である。新田町上根、高崎市原北、伊勢崎市阿弥大寺本郷等、利根川流域の遺跡からの出土例あり。	年代不明

13号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第16図	1	埴輪 不明	溝中央付近 X=27247.248・Y=- 40500.585地点。 標高28.023m。 基部片				細砂粒/良好/にぶ い橙	残存部下位に凸帯?の剥離痕。外面は刷毛目。内面は篋撫。	8世紀前半代

遺物観察表

16号溝出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第13図	1	須恵器 甕	溝中央部 X=27253.698・Y=- 40520.332。標高 28.106m。溝底直 上。 胴部片					細砂粒/還元焰/灰 白	外面は平行叩き後篋撫でか、内面は当具痕を篋撫でで消 している。	古墳時代後期

遺構外出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19図	1	埴輪 不明	1区東寄りの南 端付近、南壁際。 8・15号溝の間の X=27236.848・Y=- 40512.908地点の Ⅲ層中から。標高 28.130m。確認面 より約1.5cm上。 小片					細砂粒/良好/鈍い 橙	外面は刷毛目。内面は篋撫で。	古墳時代後期
第19図	2	埴輪 不明	表土 基部片					細砂粒/良好/浅黄 橙	外面は刷毛目。内面は篋撫で。底部は撫で。	古墳時代後期
第19図	3	土師器 杯	1区の南西端付 近、南壁際の X=27230.274・Y=- 40572.183地点。 標高28.276m、確 認面よりも約6.4 cm上。 2/3片	口	13.3			細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で、体部から底部は手持ち篋削り。	8世紀前半代
第19図	4	須恵器 甕	1区西寄りの中 央、X=27241.087・ Y=-40557.442地 点のⅤ層中から 出土。出土標高は 28.532mで、確認 面より約2.2cm上 からの出土。 胴部片					細砂粒/還元焰/灰	胴部上位片か。外面には平行叩き痕、内面には無文の当具 痕が残る。外面に降灰が付着。	8世紀前半代
第19図	5	須恵器 甕	2区の中央、北寄 りのX=27263.521・ Y=-40495.681地 点のⅢ層中から の出土。出土標高 は28.113mで、確 認面直上。 胴部片					細砂粒/還元焰/灰 白	内外面とも篋撫で。	8世紀前半代
第19図	6	須恵器 甕	表土 底部片					細砂粒/還元焰/灰	外面は篋削りか。内面は篋撫で。	8世紀前半代
PL.11	7	龍泉窯系 青磁碗	1区の北東寄り、 9号溝の東岸の X=27255.556、Y=- 40518.928地点。 標高は28.277m で、遺構確認面よ り13.7cm上。 口縁部片	口 底	-	高	-	/良好/灰	鎚蓮弁文。	13世紀。
第19図 PL.11	8	鉄製品 釘	2区東寄り中央。 X=27263.081・Y=- 40489.366。標高 28.271m。遺構確 認面レベルより 3.1cm上。 ほぼ完形	長 幅	6.5 1.0	厚 重	0.8 10.4	//	わずかに頭部が折れているか。脚部の端部は欠損してい る。	年代不詳

第4表 非掲載出土遺物集計表

遺構名	埴輪		古代土師器				古代須恵器				中世				近世						時期不詳						計					
	点数	重量	小型製品		大型製品		中国磁器		国産 焼締陶器		在地系 鉢・鍋		国産磁器		国産 施釉陶器		国産 焼締陶器		在地系 焙烙・鍋		在地系 その他		土器類		瓦				その他			
			点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
3号溝			1	2																										1	2	
4号溝	3	67			4	143	1	9					22	240	11	197	1	28	5	171	1	47	7	219	10	954			65	2075		
5号溝															5	98			1	23								1	42	7	163	
6号溝																												1	1	1	1	
9号溝			1	12																										1	12	
11号溝				1	52																									1	52	
17号溝											1	25																		1	25	
1区遺構外				1	17									3	18									3	170					7	205	
2区遺構外	2	68	2	10	1	26			1	23					2	25							2	57					10	209		
計	5	135	4	24	2	69	5	169	1	9	1	23	1	25	25	258	18	320	1	28	6	194	1	47	12	446	10	954	2	43	94	2,744

# 写真図版





1 調査区全景(上が北西)



2 1・2区調査区全景(東から)



1 3区調査区全景(東から)



2 4区調査区全景(南西から)



3 1区1号溝全景(南東から)



4 1区2号溝全景(南東から)



5 1区1号溝A-A'セクション(南から)



6 1区2号溝A-A'セクション(南から)



1 1区3号溝全景(北東から)



2 1区2号溝B-B'、3号溝A-A'セクション(南から)



3 1区2・3号溝全景(北東から)



4 1・2区4～9・11～13・15～17号溝全景(上が北西)



# PL.4



1 1区4号溝全景(南東から)



2 1区4号溝A-A'セクション(南から)



3 1区4号溝南側杭列状況(北から)



4 1区4号溝北側全景(南から)



5 1区4号溝遺物出土状況(西から)



6 2区5号溝全景(北東から)



7 1区5号溝全景(北から)



1 1区5号溝C-C'セクション(南西から)



2 2区6号溝全景(南から)



3 2区6号溝C-C'セクション(北東から)



4 1区6・13号溝F-F'セクション(北から)



5 1区6・13号溝全景(北西から)



1 2区7・8・11・12号溝全景(南西から)



2 2区7・11・12号溝C-C'セクション(北東から)



3 2区8号溝C-C'セクション(北東から)



4 1区7・11・12号溝全景(南西から)



1 1区7・11・12号溝D-D'セクション(南西から)



2 1区9・16号溝A-A'セクション(南から)



3 1区9・16号溝全景(北西から)



4 1区9号溝A-A'セクション(南から)



5 1区16号溝南側全景(南東から)

# PL.8



1 1区15号溝全景(北から)



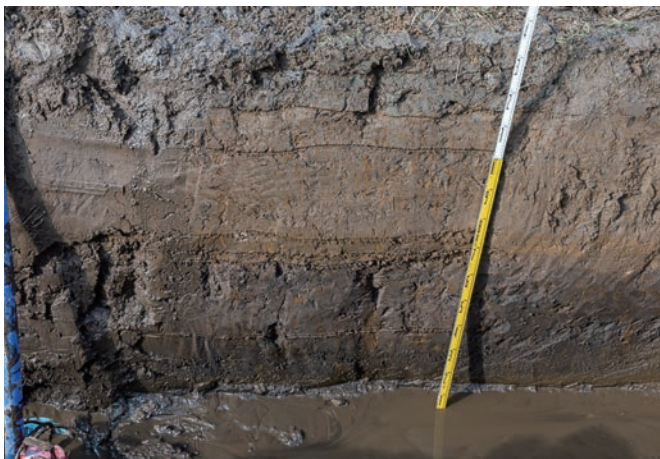
2 1区17号溝全景(北西から)



3 1区基本土層1(南から)



4 4区基本土層2(南東から)



5 4区基本土層3(南東から)



6 3区基本土層4(北から)

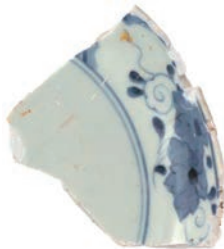
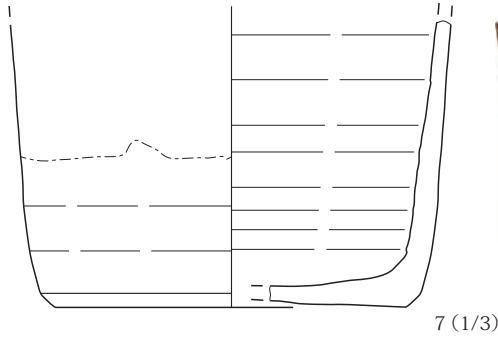
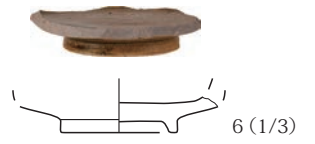
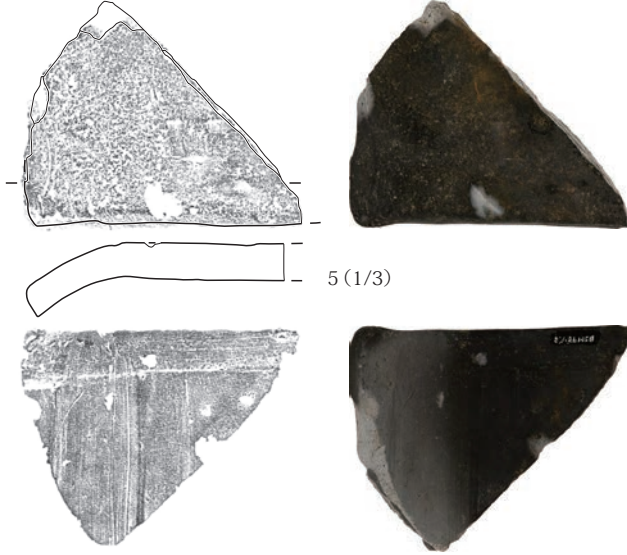
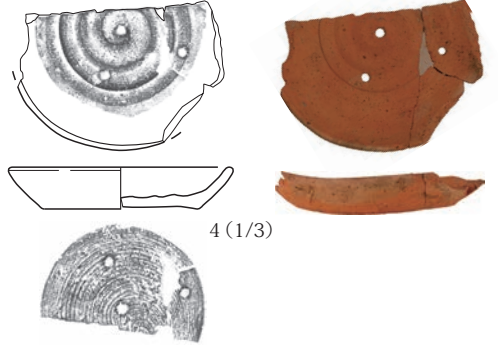


7 1区調査風景(南東から)

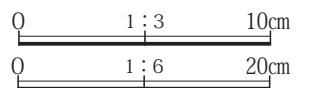
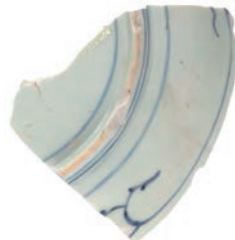
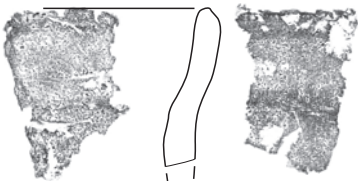


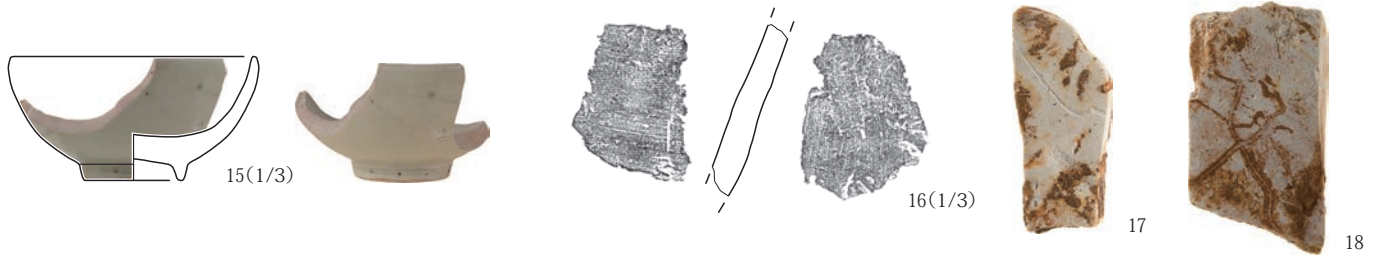
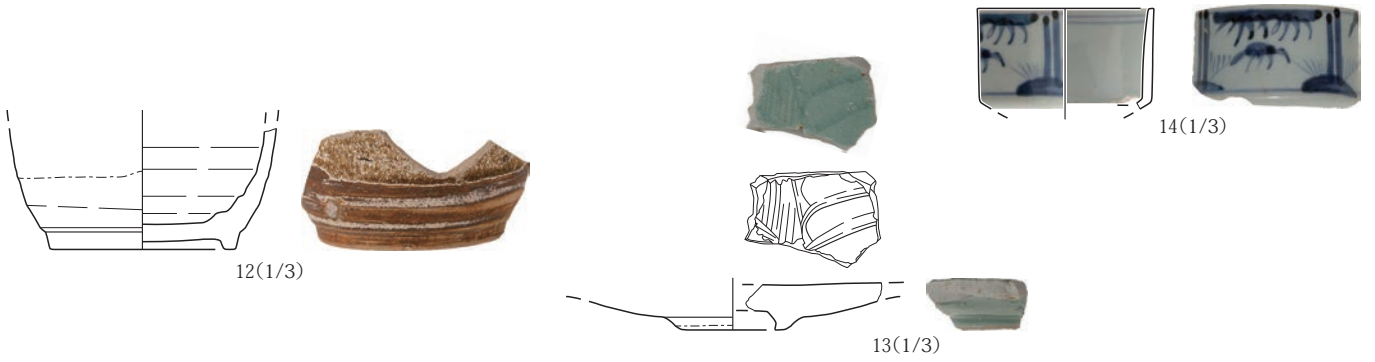
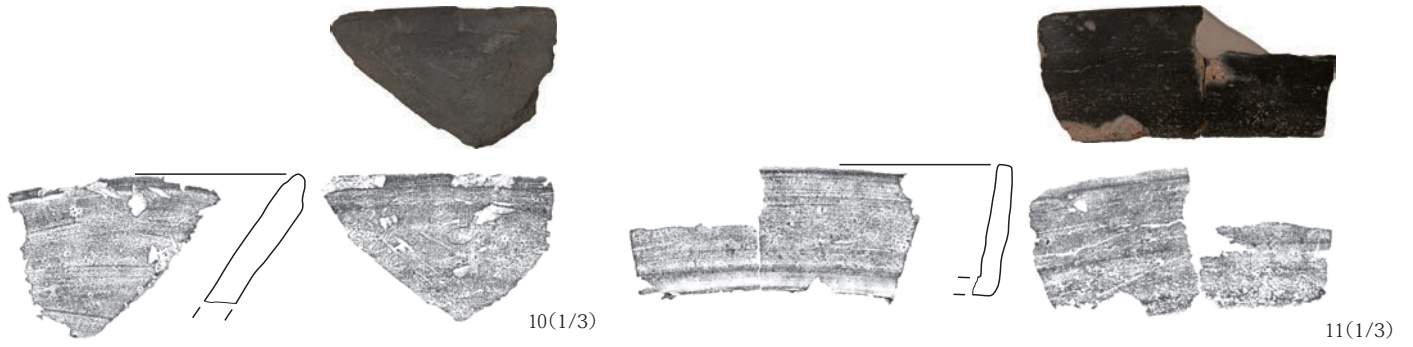
8 2区調査風景(南東から)

4号溝

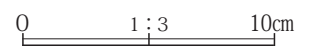
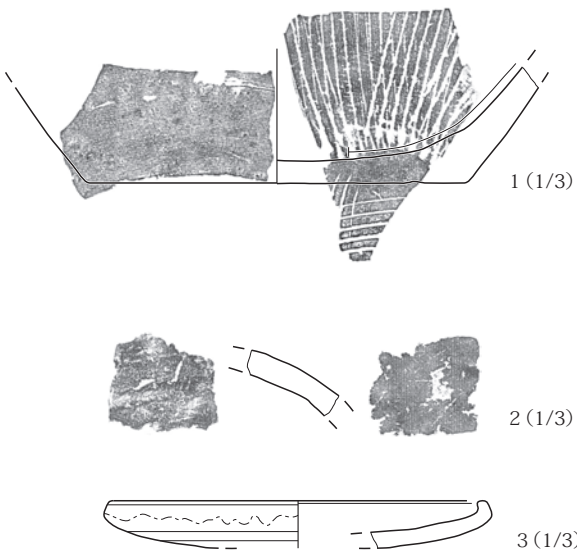


9(1/3)

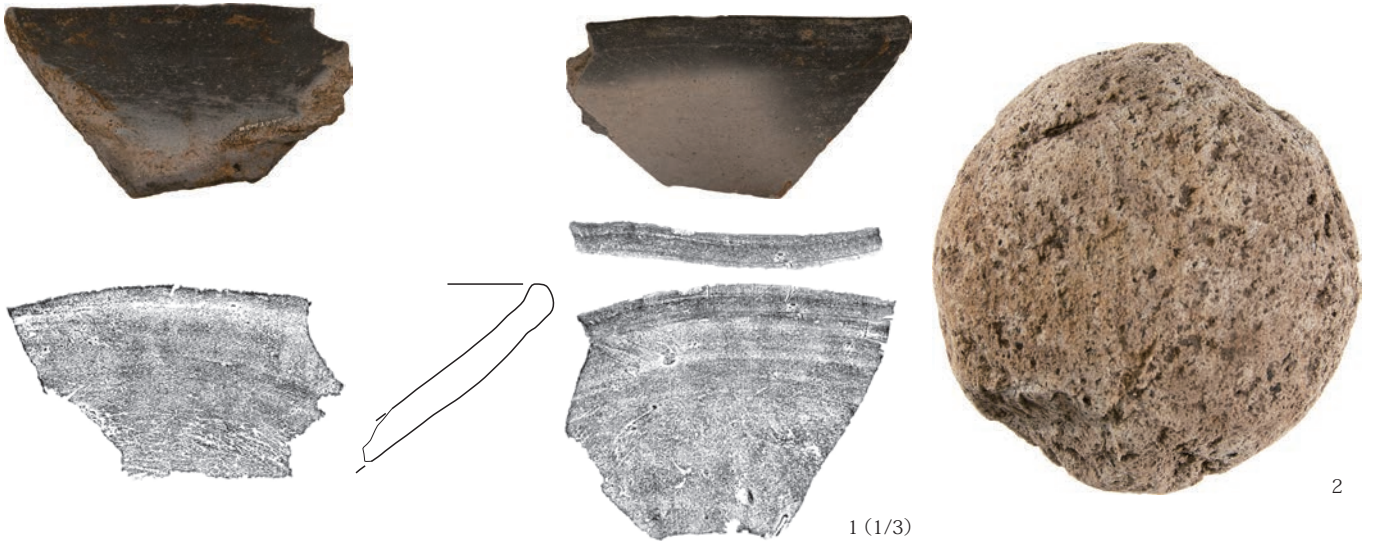




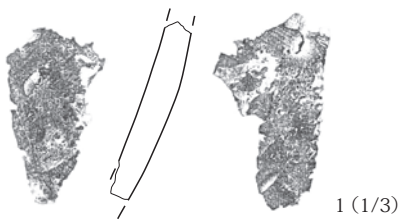
5号溝



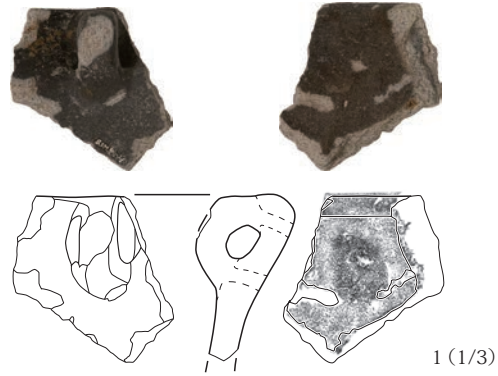
7号溝



8号溝



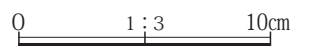
9号溝



11号溝



遺構外





## 報 告 書 抄 録

書名ふりがな	びしゃもんいせき
書 名	比沙門遺跡
副書名	一般県道古戸館林線社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	—
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	693
編著者名	高島英之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2021
作成法人 ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	びしゃもんいせき
遺 跡 名	比沙門遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしふるとちょう
遺跡所在地	群馬県太田市古戸町
市町村コード	102059
遺跡番号	TO458
北緯 (世界測地系)	36.545
東経 (世界測地系)	139.385
調査期間	20200101-0131
調査面積	2,555.780
調査原因	道路建設
種 別	集落、畑
主な時代	中近世
遺跡概要	中近世耕地-溝15+中近世陶磁器・土器+石製品+古代土師器・須恵器+古墳時代埴輪片
特記事項	中近世の溝15条
要 約	群馬県太田市の南東端、利根川と石田川との合流点付近の標高約30m前後の低地上に立地し、洪水堆積物を掘り込んだ溝15条が検出された。遺跡地は、現在までに幾度となく洪水を受けたものと考えられる。検出された溝には、互いに重複するものもあり、数時期に亘って掘削されたものと考えられる。調査対象範囲のほぼ中央から検出された、北西から南東へ流れる4号溝は、他の溝と比べて規模が大きく、この遺跡内の主体的な水路として整備された溝の可能性が高い。埋土中からは陶磁器類を中心に瓦や木製品などが出土し、近世のものと考えられる。また、中央付近から南西側縁辺にかけて土留めと考えられる木杭列も検出された。4号溝以外の溝についても、出土遺物や溝の埋土の様相から中近世のものと考えられる。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第693集

## 比沙門遺跡

一般県道古戸館林線社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点)  
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

令和3(2021)年7月20日 印刷

令和3(2021)年7月30日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／ジャーナル印刷株式会社

---



